

# 同志社大学

## 2016 年度卒業論文

大学生の思いやり意識についての研究  
—人生満足度・心のゆとり感・家族システムの視点から—

社会学部社会学科  
学籍番号：19131037  
氏名：村瀬 太一  
指導教員：立木 茂雄  
(本文の総字数：27368 字)

## 要旨

論題：大学生の思いやり意識についての研究  
— 人生満足度・心のゆとり感・家族システムの視点から —

学籍番号：19191037

氏名：村瀬 太一

日本の青年の思いやり意識は世界的に見ても低いことや、子ども達に思いやりを育ませようとする子育て意識が見られるなど、日本社会において思いやりの低下が問題視されるようになっている。では、思いやりはどうしたら育まれるのか、どのような心の状態であれば思いやりは生まれるのか、そして本当に現代の青年は「思いやり」意識が低いのだろうか。このような疑問をもとに、思いやりについて、人生満足度、心のゆとり感、家族システムという3つの視点を交えて調査を行った。

同志社大学の学生に質問紙によるアンケート調査を行い、結果を全て数値化しSPSSで解析を行った結果、人生満足度は心のゆとり感を媒介することで思いやり意識を高めること、家族システムがバランス型の家庭であればあるほど心のゆとり感を高め、中間型の家庭であればあるほど思いやり意識を高めることが証明された。そして、行動に表れない思いやりの形に注目することで、青年の思いやり意識は決して低くないということを確認することができた。

キーワード：思いやり、人生満足度、家族システム

## 目次

はじめに	1
1 先行研究	1
1.1 「思いやり」について	1
(1) 向社会的行動	
(2) 共感性	
(3) 社会的スキル	
(4) 思いやり	
(5) 親の思いやり	
1.2 「心のゆとり感」について	5
(1) 政府の施策におけるゆとり	
(2) 哲学的観点からのゆとり	
(3) 社会学・心理学観点からのゆとり	
1.3 「人生満足度」について	8
1.4 家族システムについて	9
1.5 問題提起	11
2 調査方法	11
2.1 調査の概要・対象	11
2.2 調査項目	11
2.3 分析方法	12
3 調査結果	
3.1 各項目の回答	13
(1) 思いやり	
(2) 心のゆとり感	
(3) 人生満足度	
(4) 家族システム	
3.2 相関分析の結果	19
3.3 一元配置分散分析の結果	21
4 考察	25
4.1 記述統計の考察	25
4.2 相関分析の考察	26
4.3 分散分析の考察	27
終わりに	28
参考文献	
付録	

## はじめに

近年、「思いやり」のある子を育てるとか、「思いやり」のある社会を目指してなど、「思いやり」意識の低下が問題視されるようになった。実際のデータとして、内閣府の平成 23 年度「親と子の生活意識に関する」調査によると、子ども教育についての質問で、「他人を思いやること」を「重視している」と回答した割合は 98.7%という割合を占め、「思いやり」のある子どもを育てようという意識が社会全体に広がり、それを実践しようとする動きも見られることがわかる(内閣府 2011)。しかし、松井洋・中里至正・石井隆之の、愛他性(ここでは「思いやり」と同義であるとしている)についての 5 カ国の国際比較研究によると、文化によって愛他性の構造などに違いはあるものの、日本の愛他性は総じて低いという結果が得られた(松井ほか 1998)。また、「思いやり」が行動として表れたものとして、ボランティア活動をあげることができると思うが、平成 25 年度の内閣府の調査では、日本の若者のボランティアに対する興味は 35.1%と、比較した 7 か国の中で最も低く、唯一興味がないと答えた割合(41.9%)を下回るという結果になった(内閣府 2013)。このように、社会全体として子ども達の「思いやり」を育もうという動きは見られるものの、まだまだ日本の若者たちの「思いやり」意識は低いという現状がある。

では、どうしたら「思いやり」意識は育まれるのであろうか。そしてどのような心の状態であれば、他者への「思いやり」の気持ちは生まれるのであろうか。また、本当に現代青年は「思いやり」の気持ちは低いのであろうか。本稿では、このような青年の「思いやり」意識についての問いを、「人生満足度」「心のゆとり感」「家族システム」といった視点を踏まえて考察していく。

## 1 先行研究

### 1.1 「思いやり」について

#### (1) 向社会的行動

日本における「思いやり」の研究は、1960 年代半ばごろから米国を中心に盛んになった向社会的行動の研究が基礎になっているものが多く、「思いやり」は「向社会的行動(prosocial behavior)」や「愛他行動(altruistic behavior)」とほぼ同義として研究・定義されてきた(坂井玲奈 2005)。この向社会的行動や愛他行動といった、他人への援助や分配、寄付に繋がる行動は、「社会的行動(social behavior)」という分類に分けられ、これは対人的な面でのつながりをつけるタイプの行動のことである(菊池章夫 1983)。

Nancy, Eisenberg & Paul, H. Mussen は、向社会的行動を「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為のこと」(Eisenberg & Mussen 1989=1991: 6)と定義している。つまり、ボランティア活動や、お年寄りの方に席をゆずるといった行動を総じて向社会的行動というのである。また、「外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとしたりする行為のことである。このような行為をする場合には、行為をする側の者にあるコスト(損失)や自己犠牲、危険といったものが伴うことが多い」

(Mussen & Eisenberg-Berg 1978=1980: 6) とも定義されている。そして、向社会的行動が持つ4つの特徴を述べている。それは、①その行動が相手の利益になる援助であること。②金銭や物質的な外的報酬が目的とされていないが、向社会的行動をとることによって、自信がついたり、自尊心が高まったりといった内的な報酬を得ることは認めてよいこと。③行動には何らかの損失(コスト)をとらなければならないこと。④自発的にされること (Eisenberg & Mussen 1989=2004: 172)。しかし菊池はこれについて、この4つの特徴すべてが当てはまるものが「向社会的行動」の定義であるとする、「向社会的行動」がまれな行動になってしまうと考え、もっとゆるやかに考えてもよいのではないかと述べている(菊池 1984)。一方、愛他行動は、「向社会的行動の特殊なタイプであり、他人のためになることをしようとする自発的な行為の中で、内発的に動機づけられたものである。向社会的な行動なかでも利己的な動機が含まれていない場合だけを愛他行動と呼ぶ」(二宮 2004: 172) と定義されている。

菊池は上記の考え方のもと、図1に示したような向社会的行動を理解するためのモデルを作成している(菊池 1983)。社会的変数には、どのような家庭で育ったか、向社会的行動をとるモデルが存在したかといった要因が含まれる。状況変数は、とられる向社会的行動に緊急性があるかどうか(溺れている子を助けるのか、赤い羽根募金をするのか)や、自分以外にも助けの手を差し伸べることのできる他者が存在するかどうかといった要因が考えられている。援助を求めている個人の特徴は、助けを求めているのが知人であるかどうかや、子どもや高齢者といった社会的弱者であるのかといった要因のことである。そして文化的変数は、地域差や階層差といった文化的な特徴に基づく要因のことである。また、向社会的行動の生起のプロセスとして、状況の認知(気づき)から意志決定、実際の行動という流れがあるとし、気づきから意志決定の間には、向社会的判断、共感性、役割取得の3要素が関連しあっていると考えている。向社会的判断とは、様々な変数が影響し合ってもたらされるある状況の中で、自分がどう行動したらよいかを判断する基本的な枠組みのことで、この判断をもとにして向社会的行動がとられる場合に、その動機付けとして働くのが共感性と役割取得能力である(菊池 1983)。

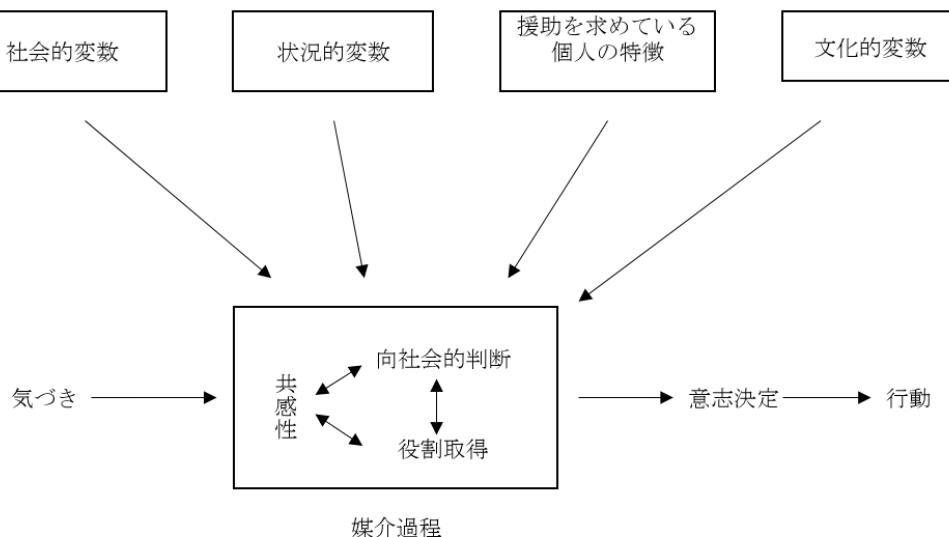


図1 向社会的行動のモデル 出典：菊池章夫(1983)

## (2) 共感性

共感性と役割取得能力が向社会的行動に影響を及ぼすことについては多くの研究者が言及している。N. Feshbachによると共感性とは、「他人の情動的反応を知覚する際に、その他人と共有する情動的反応」(Feshbach 1976=1980)のことである。この共感性には3つの要因がある。第1の要因は、相手が喜んでいるのか悲しんでいるのかを区別し、それに名前づけ(ラベリング)できる能力があることである。第2の要因は、他人が経験しているのと同じやり方でその状況をとらえ、他人の感情を予測するといった能力である。つまりこれは役割取得能力(role-taking ability)である。そして第3の要因は、他人の経験している情動と同じ情動を感じる能力である。これらの能力は、子どもの発達段階に応じて身につけていく能力であると考えられている(菊池 1983)。また都留春夫は共感について、「他人がいま何かを経験しているときにその内面で動いている感情や情動を、その人とかかわっている他者が自分のことのように、その時その場で共に感じていることである」(都留 1980: 2101)と述べている。今相手が感じている感情が何なのかを理解し、その感情がどういった気持ちなのかを予測することで、相手と同じような気持ちになることが共感なのである。そして菊池は、「相手が困っていることを知る(認知)だけでは、必ずしも相手を助けようとする気持ちにはならないかもしれないが、その苦しみを共有(情報の共有)することは、向社会的行動をとらせる動機にはなるはずである」(菊池 1984: 120)と述べている。

この共感性を「罪のない傍観者モデル」という理論で捉えたのが Martin, L. Hoffman である。これは、誰かが(身体的・情動的・経済的に)痛がっていたり・苦しんでいたりをしている傍観者が、その相手を助けるか、助けなかった時にどう感じるのか、ということを考えるモデルである。そして向社会的行動には、不快や痛み、危険などの苦痛を感じている誰かを助けることが含まれていることから、共感性を「共感的苦痛」として考えている。共感的苦痛には、①援助行動とプラスの関係にある、②援助行動に先行する、③援助の後では見る側は気分が良くなる、といった3つの特徴がある。しかし、自分とは別の傍観者がいることが向社会的行動を妨げる要因となることや、援助に伴うコストが高くなると、親切や愛情といった気持ちだけでは援助行動に結びつかないこと、そして、そのコストは、共感することで援助をさせられてしまうのではないかと恐れて、共感を避けようとするにつなるといった、共感的苦痛が常に援助に結びつかない場面も存在すると主張している(Hoffman 2000=2001)。これらのことから、傍観者モデルは、「援助しようとする動機とそれを妨げることができるほど強力な自己中心的な動機との間の対立を含んだもの」(2000=2001: 42)なのである。この傍観者モデルの考えから、困っている人の苦痛を感じることができても、行動に移せないという状態を理論的に解釈することができるのである。

## (3) 社会的スキル

向社会的行動に影響を及ぼす要因として、菊池(1983)や Eisenberg(1989=1991: 206)のモデル以外にも、様々な理論モデルが提唱されているが、堂野恵子は共通した観点して3点のことをあげている。それは「役割取得能力」、「共感性」、「社会的スキル」である(堂野 2000)。菊池によると社会的スキルとは、「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル(技能)のことで、相手から肯定的な反応をもらうことができ、相手の否定的な反応は避けることができるようなスキル」(菊池 1998)であると定義している。また社会的スキルが身に付いていないところでは、思いやり行動を考えることはできないとも述べている(1998)。同じよ

うに鈴木隆子も、向社会的行動は他者との相互作用の中で行われるものである、その実行にはある種の技能が必要であり、それが社会的スキルなのであると述べている（鈴木1992）。向社会的行動を妨げる要因として、Hoffman の罪のない傍観者モデルでの理論以外にも、援助行動をしたくても、社会的スキルが身につけていないがために行動に移せないといった要因も考えられるのである。

この社会的スキルは、学習による習得することが可能である。Hoffman は、子どもへの親のしつけの仕方が向社会的行動にどのような影響を及ぼすかの実験を行い、しつけのタイプを3つに分類している。第1は「力中心」のタイプで、身体的な罰や、物や権利を奪ったり、脅したりするやり方である。第2は「愛情の除去」タイプで、子どもを無視したり1人にしておいたりするやり方である。第3は「誘導」タイプで、子どもを説得したり、子どものやったことの意味を説明してやったりするやり方である。Hoffman の分析から、「力中心」のしつけを受けた子どもは向社会的性の水準が低いのにに対し、「誘導」的なしつけを受けた子どもはその水準が高く、「愛情の除去」タイプは、一貫性が見られないことが分かっている（Hoffman 1963=1980）。子どもの態度が悪いからと、ただ単に体罰を与えるのではなく、なぜその行動や態度がいけないのかを誘導的に教えながらしつけていくことで、子どもに「思いやり」の心を育てていくことができるのであろう。

#### (4) 思いやり

ここまで、向社会的行動とそれに関与する要因について見てきたが、「思いやり」についての研究が向社会的行動を基礎にしていることもあり、人々にどれだけ「思いやり」があるのかを調べるには、人々がどれだけ「思いやり」のある行動をしているのかを測ることで調査されてきた。しかし、行動に表れないからといって、その人に思いやりがないと言いきっていいのであろうか。困っている人を見かけたのに何もしない人がいるとして、それはその人に「思いやり」の気持ちがないから何もしなかったのではなく、社会的スキルが不十分であったり、行動することによるリスクが高かったりと、行動を妨げる要因がそこに存在した結果ゆえではないのだろうか。遠藤利彦は、「他者の感情や状態に関心を払い共感することと、現にその行動が他者のためになるということとは本来、明らかに違うレベルの話なのである」（遠藤 2000: 743）と述べ、つもりとしての「思いやり」が結果としての「思いやり」につながらないばかりか、叱責の対象になったり、利己的な動機からの行動がたまたま他者のためになる結果につながったりする場合も存在する、と続けている（2000）。

平木典子によるとそもそも「思いやり」とは、『思い遣り』とも書き、『遣る（やる）』は『遣う（つかう）』でもあり、それらは『働かせる』ことを意味する。つまり、思いやりとは、自分の思いを働かせて、相手のことを理解しようとする」（平木 2000: 722）なのである。また、「思いやりに」は3つのステップがあり、第1ステップは、自分の思いを働かせることで相手の気持ちを予測すること、つまり共感することである。第2のステップは、相手のパーソナリティ傾向やものの見方、感じ方の特徴を理解し、そこに立って状況を捉えなおしてみることで、つまり相手の立場に立つこと、役割取得能力である。そして第3のステップは、自分が働かせた思いが必要に応じて、何らかの形で相手に伝わることである。すなわち「思いやり」とは一方的なものではなく、相互性のあるものなのである（平木 2000）。このことから、「思いやり」は何らかの形で相手に伝わる必要があるものであり、悲しんでいる友人のためにあえて何もしないという行動に表れない「思いやり」の形も、「思いやり」

として考えることが出来るのでないだろうか。

また都留は、「ひとに対して思いやりが示せる人は、自分がまず思いやりを受けたことがあるに違いない」(都留 2000: 2106)と述べ、「思いやりは受けた者の心を豊かにし、その人自身も、自分から進んで周囲の人に向かって心を配り、自分が受けたのと同じような思いやりを込めて、積極的な援助の手を他者に向けて差し伸べたい気持ちになっていく」(2000)とつづけている。

以上のことから、「思いやり」は、受けた人送った人双方の心を豊かにするものであり、その構造は、向社会的行動と同じように、共感、役割取得能力、社会的スキルを必要とするものである。そして、行動に表れるだけが「思いやり」ではなく、あえて行動には出さないような「思いやり」の表し方も確かに存在すると考えるべきなのである。

## (5) 親の思いやり

最後に、子どもの「思いやり」を育むために大切となる、親の「思いやり」について見ていく。都留は、子どもは両親と適度に争うことが必要であり、子どもと争わないようなやさしすぎる親や、逆に厳しすぎる親の下では、手の付けられない子どもに育ってしまったり、無気力になってしまったりすると述べ、そのような親には真の「思いやり」が欠如していると考えている。そして、親に対して正常な反逆性を示すことができる余裕のある家庭環境が子どもの「思いやり」を育むためには必要であり、その基盤には夫婦間の愛のきずなの強さや、親子間の信頼と愛情の関係がしっかり出来上がっていることが重要であると述べている(都留 1980)。

また平木は、「思いやりのモデルは親であり、大人なのであり、思いやりの気持ちを引き出すのは、か弱い子どもであり、不完全な人間そのものの存在であろう。そこに思いやりを育む基盤があるように思える」(平木 2000: 724-725)と述べ、赤ん坊の頃の子どもと親の関係の重要性を主張している。

## 1.2 「心のゆとり感」について

### (1) 政府の施策におけるゆとり

普段私たちが何気なく耳にする「ゆとり」という言葉。ゆとりとはいったいどういうものなのだろうか。それを考えるにあたって、まずは政府が国をあげてゆとりをどう捉えているのかを見ていく。

教育分野においてゆとりという言葉が使われるようになったのは、1977年の教育課程審議会による教育課程の改訂からである。文部科学省によるとこの改訂は、「ゆとりと充実」というキャッチフレーズのもと、ゆとりのあるしかも充実した学校生活を実現するためのものであり、思い切った授業時間の短縮を図り学校の授業にゆとりを持てるようにすることで、地域や学校の特色に応じた創意工夫による教育の発展をねらうものであった(文部科学省 2016)。これは、問題視されていた受験戦争や詰め込み型の教育を反省し、親や学校側に自由を委ねることで、ゆとりを持った教育の発展を目標としたのである。

しかしこのゆとり教育については、子どもの発達を押し進めるところか、逆に子どもの学力低下の要因になったと様々な批判の声があり、これについて新井郁夫は、子どもの教育を、親や教師の自由に委ねておいたのでは、子どもが身に付けるべき学力の形成にはおぼつかないというのが、反対派の主な論理であると述べている(新井 2004)。



また、労働や生活全般についても様々な施策がとられている。例えば、「90年度の連合白書では、『ゆとり・豊かさあふれる平和社会への道をひらこう』という副題の下、賃上げ、労働時間短縮、公正分配など、ゆとり実現の方策が様々に論じられている」(古川秀夫ほか 1993: 171)。2008年に内閣府が発表した国民生活白書の中の「ゆとりと成熟した社会の構築に向けて」では、「消費者市民の積極的な関与によって築かれる社会は社会的弱者が住みやすい社会でもあることを意味する。それは皆に暖かい眼差しを向けられるゆとりと成熟した社会であろう」(内閣府 2008)と記している。そして本文の中で、日本がゆとりに欠けていることを言及し、ストレスを感じていない、つまりゆとりがある人たちは時間的に余裕がある人たちであり、バカンス文化の普及がストレスフリー社会実現のためには必要であると公表している(内閣府 2008)。

教育、労働、生活全般においてゆとりの必要性を強調してはいるが、古川秀夫・山下京・八木隆一郎はいずれの議論にも重大な誤りが見出されると主張している(古川ほか 1993)。そしてそれは、『ゆとり』を自由時間だと決めつけるにしろ、あいまいなままにしておにしろ、とにかく現実働いている人たちがどう『ゆとり』をとらえているのか、一顧だにしている点である」(1993: 171)と続けている。また富田真弓は、『ゆとり』という言葉は、心理臨床の場面で心の状態を示す言葉として有用な概念であり、その意味は経験的に理解される一方で、『ゆとり』とは何かと問われると答えるのは難しい」(富田 2008: 223)とも述べている。このように、「ゆとり」という概念は、イメージとしては理解できる概念ではあるが、実際に人によって感じ方はばらばらであり、政府の施策の中でも、ゆとりが何を意味するものであるのかは明確には記されていない。それゆえ、政府が掲げたゆとり教育が何を意味するものであるのか十分に理解できていない教師や親があふれ、結果としてそれは多くの反感を招くことにつながったのであろう。ではゆとりは学術的研究ではどのように定義されているのであろうか。

## (2) 哲学的観点からのゆとり

稲垣良典はゆとりの魅力についてこう述べている。

「ゆとり」という言葉は何か望ましく、快いひびきを伝え、我々の心の奥深いあこがれにこたえてくれる。(中略)人が長い修練の後にやっと到達できるような、理想的心境を表す言葉でもある。(中略)「ゆとり」という言葉は何か人生にうるおいを与えるもの、人間的な豊かさをさし示している。(稲垣 1982: 210)

そのような魅力的なゆとりは暮らしや経済的側面から見れば、余剰から生み出されるものであるとすると、物質的な豊かさは生活にいろどりと潤いを与え、ゆとりのある暮らしを可能にしてくれるはずである。しかし、単なる物質的な豊かさや物の満ちあふれだけでは、人々の欲望を肥大化させることにつながり、結果としてそれはゆとりとは対をなすあせりやいらだちを生み出してしまうのである(稲垣 1983)。

また土居健郎は、ゆとりは価値の二元性を前提にしているのもであると定義している(土居 1983)。彼によると「ゆとり」とは、「表にある価値と裏にある価値と二つあって、裏にある価値が表にある価値を超えている、実はそっちの方が高いということが見通されているときに生まれる心の落ち着き」(土居 1983: 132)であり、それがゆとりの本質であるようだ。

このことを分かりやすく言うために、土居は先ほどあげたゆとり教育について言及している。「自由時間ならまだいいけれど、ゆとりの時間なんてナンセンスです。ゆとりの時間というのはおかしいが、時間のゆとりをつくることはできます。しかし、それには、心のゆとりがなくてはならず、それは裏に隠された価値があって初めてできる芸当です」(1983: 132)。つまり、自由な時間も「心のゆとり」という裏の価値があってこそ時間的なゆとりとして意味をなすのであり、自由な時間という表の価値があるだけでは、ゆとりの時間としての意味をなさないのである(富田真弓・高橋靖恵 2005)。ゆとりにはこの二元性があるゆえに、いくら自由に使える時間であろうと、物質的に豊かであろうと、裏の価値である心のゆとりが備わっていないために、ゆとりを感じられないという状態が起きてしまうのである。

さらに稲垣は、ゆとりのあり処についても述べている。ゆとりは、何かを豊かにもつことによって、ただちにゆとりをもつことができるのではなく、ゆとりは自分自身のあり方である「存在」、つまり「人間存在としての豊かさ」に関わっているのであると述べている。そして「人間存在としての豊かさ」を読み解く鍵として、「憩い」という言葉に注目する。ゆとりは何かを求めてせわしく動き求めることとは逆に、求めていたものがすでに得られたところから生じるやすらぎであり、それは「憩い」に相当すると考えるからである。その憩いは人間が生きていくうえで欠かせない労働の中止、休息としてあるだけではなく、労働よりももっと貴重な活動のためにとっておく時間という意味を持っており、言い換えると、単なる労働の休息であるにとどまらず、より高次の活動に従事することを通じて、人間が自分自身を回復し、再発見するための時間なのである(稲垣 1982)。つまり「ゆとり」とは、「人間が人間であるため、人間としての『存在の豊かさ』を実現するために必要不可欠なもの」(1982: 219)なのである。

これらのことをまとめると、「ゆとり」には表の価値と「心のゆとり」としての裏の価値があり、この裏の価値なしには時間的ゆとりや物質的ゆとりとしての表の価値を感じることは出来ないのである。そしてその「心のゆとり」は、人が人らしくあるために存在するものであり、「ゆとり」があることによって高次の活動(稲垣は例として学問や芸術、道徳、宗教をあげている)は生まれるのである。

### (3) 社会学・心理学的観点からのゆとり

#### a) 富田真弓・高橋靖恵の研究

九州大学の富田は、「ゆとりがない状態とは、不安や焦燥感を処理できずに圧倒され、視野が狭くなっている状態であると考えられる。一方、心の空間があることは、心が十分に機能しており、充実感や安心感があり、他者へ配慮するなど周囲に目を向ける視野の広さがある状態である」(富田 2008)と述べ、ゆとりとは何かを定義している。そして高橋との共同研究である国立大学生への自由記述による質的データの分析から、現代青年の「心のゆとり」についての研究を行っている。

まず、「心のゆとりとは」について尋ねた結果から、次の2つのことが示唆された。1つは、「心のゆとり」は心の状態からの記述と行動や場面からの記述が見られたということである。このことから、「心のゆとり」というときに、心の状態と行動の両場面から捉えられているということが判明し、今後この両面から捉えていくことが必要であることが分かった。もう1つは、心の状態としての「心のゆとり」は、積極的に表記したものと消極的に表

記したものがあつたということである。このことからゆとりがほしいという理由に、充実感を得たいというような積極的な動機と、切迫感をなくしたいといった消極的な動機という2つがあることが分かった。

次に、「心のゆとりを感じる時はどんなときですか」という質問の結果を分類したところ2つのカテゴリーが見出された。1つは、「心のゆとりとは」と一致するカテゴリーである。この中には、充実感や他者に配慮できるといった、「心のゆとり」があるときの心の状態や結果としての行動と考えられる分類と、友達や家族との関係性や人とのコミュニケーションといった「対人関係が円滑」という分類がある。人間関係がうまくいくことは結果として「心にゆとり」をもたらすのである。もう1つは、「心のゆとり」を生み出すと考えられるカテゴリーである。親しい人と過ごすや1人で過ごすという分類や、場所についての分類があげられ、心を安らげることのできる場所についての記述であつた。これは、稲垣の「心のゆとりは心の憩い、つまり心が自分にふさわしい場所を得てやすらっている状態であり、そこからして快さと喜びが生まれてくる」(稲垣 1982)ということから、1人になって自分のペースで過ごしたり、親しい人と過ごしたりすることで「心のゆとり」を感じているとも考えられ、ゆとりが生まれる場所について考える必要性を発見した。

そしてこれらのことから、青年の特徴として、他者や周囲との関係の中で自分の心の状態を感じ取っているということが見られ、一概には言えないが、青年はその時の状況に応じて「心のゆとり」を捉える傾向にあるのではないかとということが分かった。また、切迫感を感じるという「心のゆとり」についての消極的な記述があることから、「ゆとり」を意識せざる得なくなった今日の状況を反映しているように考えられるのである(富田・高橋 2005)。

## b) ゆとりと主体性

ゆとりを持つ上で主体性が必要であることを主張している研究者もいる。我妻洋・藤原房子・松田義幸は、欲望の肥大化を超えた時の心の落ち着きについて、「たとえ経済的に貧しくても、家は小さくても、自分にはもっと別の深い広がりのある世界があるんだと思えば、それを超えた心の豊かさが出てくるはず」(我妻ほか 1984)と述べている。また、「本当のゆとりということになると、追い立てられてやっついていくみたいな感じじゃなくて、自分の内発的な欲求でやっついていくもの」(1984)とも述べており、これは稲垣(1982)の高次の活動につながってくる考え方であると思われる。他にも富田(2008)は、上田薫(1980)の「主体性がなくてはゆとりは生じない」ということから、「時間に追われるのではなく、そこに主体性を持って、情報の取捨選択、生き方の取捨選択をしていくことがゆとりを持つ上でも必要であり、今日においても、その主体性のあり方が問われているのではないだろうか」(富田 2008: 229)と述べている。これらのような主体性とゆとりの関係は、「人生満足度」や「思いやり」に関連してくる考え方であると思われる。情報や生き方の取捨選択をできている人というのは、欲望の肥大化を防ぐことができていると考えられ、それは人生への満足度を高めることにつながるのではないだろう。さらに自発性が求められる「思いやり」は、「心のゆとり感」から生まれる主体的な高次の活動と関連してくるのではないだろうか。

## 1.3 「人生満足度」について

「人生満足度」に関する研究は、人々の幸福度に関わる研究の中で調査されてきた。大石繁宏によると、幸福や心の健康のことを指す言葉として、英語ではハピネスと並んでウェ

ルビーイング (Well-Being) という言葉が使われることが多く、その中核にあるのは、何が理想の人物像であるのかとともに、何が理想の生き方、人生なのかということであると述べている (大石 2009)。そして幸福の概念は、歴史的、文化的、社会の組織的相違から様々なものがあるが、幸福度を測る代表的概念として「主観的幸福感 (Subjective well-being: SWB)」をあげている。

大石によると主観的幸福感とは、どれぐらい自分の人生に満足しているか、どれぐらい頻繁に幸せを感じるのかといった判断自体は、個人の価値観によって判断してもらい、研究者の価値観 (何が幸福なのか) を押し付けない方法で測定するものであり、個人の主観的な視点を重視するアプローチであると述べている。また主観的幸福感を、主観的ウェルビーイング (SWB) とも言う (大石 2009)。そして「SWB のアプローチからすると判断基準自体は個人差があってよいし、何でも構わない。とにかく、自分自身の基準からしてどれぐらい自分の人生がうまくいっているかを判断してもらえれば、それが貴重なデータとなりうるのである」(2009:44) と続けている。また、Frank, M. Andrews & Stephen, B. Withey によると、主観的幸福感とは、ポジティブ感情 (positive affect)、ネガティブ感情 (negative affect)、人生に対する満足感 (life satisfaction) の3つの要素から構成されており、前2つは感情面による要素、残り1つは認知面による要素と分けることができるという (Andrews & Withey 1976)。人々の幸せの度合いを、個人個人の主観的な判断で測るものが主観的幸福感であり、その中に含まれる認知的な概念が、人生に対する満足感である。本稿では、人生に対する満足感を「人生満足度」として表記していく。

D. C. Shin & D. M. Johnson は人生満足度の定義として、「ある個人が自分なりの基準で評価した、その個人の人生の質についての全体的な評価のことである」(Shin & Johnson 1997) と述べている。主観的幸福感同様、「人生満足度」も個人の主観的な基準によって測られるものである。そして Ed, Diener et al. は、ポジティブ感情、ネガティブ感情を測る一般的な尺度は存在するが、人生満足度を測る一般的な尺度は開発されていないとし、人生満足度尺度 (The Satisfaction With Life Scale: SWLS) を作成した。(Diener et al. 1985)。

#### 1.4 家族システムについて

「家族機能の科学は、目の前の家族が問題を持つのか、持たないのかを予測・批判したいという動機から、進められたのではない。なぜ家族は目の前でそのようにふるまうのか」(立木茂雄 1999: 4)、この問いに対する臨床家の経験則に、合理的な説明を加えたいという試みの中から生まれてきたのが、家族システムの機能に関する理論モデルである(立木 1999)。その1つとして1979年、David, Herman, Olson は、結婚・家族システムを16タイプに分類する「円環モデル (Circumplex model)」を発表した。円環モデルでは、「きずな (cohesion)」、「かじとり (adaptability)」という2つの次元が、家族機能を決定する上での中心的な作用をもたらすとしている。そして、きずな、かじとりの両次元が中庸であるときに、結婚・家族システムの発達に最も効果的であると述べている (Olson 1979)。

円環モデルにおいて「きずな」は、「家族の成員が互いに対して持つ情緒的結合」と定義され、情緒的結合、境界、連合、時間、空間、友人、意志決定への参加、趣味とレクリエーションといった変数から評価・測定される。そして「きずな」の定義には、家族の成員相互の情緒的結合の程度に関係している2つの構成要素が含まれている。1つは、家族成員を感情的に同一化させる側面で、「きずな」の極端に強い段階(ベッタリ)として表現される。もう

1 つは反対に、家族の成員を家族システムから遠ざけようとする側面で、「きずな」の極端に弱い段階(バラバラ)として表現される。そして、この2つの構成要素のバランスの取れた段階(ピッタリとサラリ)で家族システムは最もよく機能し、個人の成長も促進されると考えられる。しかしこの中庸な段階は常に維持されるわけではなく、健康的な家族システムである家族は、状況的ストレスや発達的变化に応じて、様々な段階になりうることができ、その幅が広いとされている。一方バランスのとれていない家族では、きずなが極端な関係で固定化されており、長期的に見れば、家族が変化・成長していく過程でより問題が発生しやすいと言えるのである(立木 1999)。

円環モデルにおける「かじとり」は、「状況的・発達のストレスに応じて家族(夫婦)システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力である」と定義され、家族の権力構造(自己主張と支配)や交渉(話し合いや処理)のスタイル、役割関係、関係規範といった変数から評価・測定される。そして、最も健康な家族システムは、真ん中の段階(キッチリと柔軟)の時である。こういった家族は形態維持(システムの現状を保守・維持する)と形態変容(システムを変化させる)のバランスが保たれており、お互いコミュニケーションを通じて言いたいことが言え、リーダーシップは民主的であり、交渉をうまく進めることができる。ゆえに正と負のフィードバック(システムの形態変容と形態維持)が適度に入れ替わり、役割を共有したり新しい役割を作ったりすることができ、きまりはすべて明快に示されているのである。反対に、バラバラや融通なしといった、「かじとり」の段階が偏っているシステムでは、家族機能は不健康になるのである(立木 1999)。

円環モデルを表したのが図2である。このように円環モデルは、「きずな」と「かじとり」の2つの独立する次元がつくる空間上で、家族システムの機能度を診断するものである。家族がこの空間の中央部に布置されればそれだけ健康であり、空間の周縁部に布置された場合、問題が発生しやすいと考えられるのである(立木 1999)。

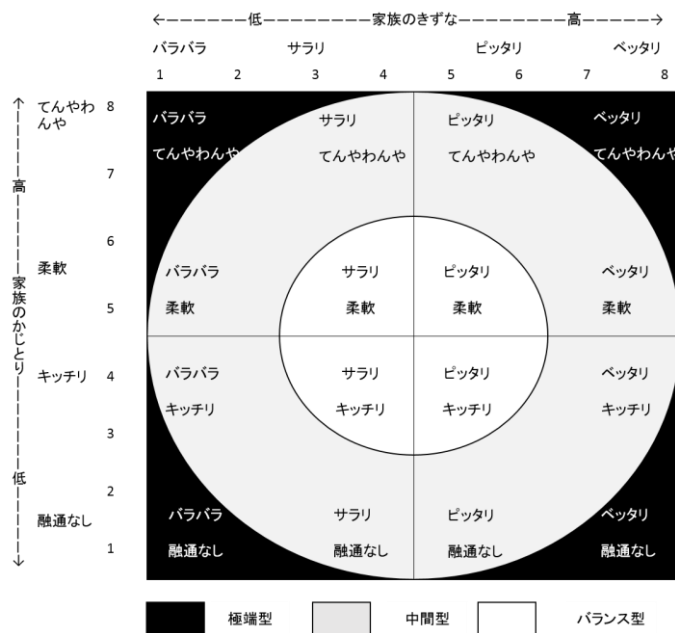


図2 円環モデル 出典：立木茂雄(1999)

### 1.5 問題提起

以上のことを踏まえて、以下の2つの仮説を立てる。仮説Ⅰ「人生満足度が高い人ほど、思いやりの気持ちが高くなる」。仮説Ⅱ「家族システムが中庸な家族ほど、思いやり、心のゆとり感が高くなる」。

仮説Ⅰについては、「人生満足度」「心のゆとり感」「思いやり」のそれぞれの定義や、富田の「心が十分に機能しており、充実感や安心感があり、他者へ配慮するなど周囲に目を向ける視野に広さがある状態」(2005: 224)という記述をその根拠としている。「充実感や安心感」というのは、幸福感に繋がる言葉であり、それは「人生満足度」のことを指していると考えられる。そして「他者へ配慮するなど周囲に目を向ける視野の広さ」はまさしく「思いやり」のことを指していると考えられる。このことから、仮説Ⅰを考えることができ、また富田の記述は「心のゆとり感」についての言及であることから、「人生満足度」と「思いやり」の間には「心のゆとり感」が媒介していると予測する。

仮説Ⅱに関しては、円環モデルの理論や、親の「思いやり」の重要性やしつけを根拠にしている。都留の親の「思いやり」が適切な状態である家庭は、夫婦間の愛のきずなや親子間の信頼と愛情の関係がしっかりとしている余裕のある家庭である(都留 1980)という記述から、親の適切な「思いやり」がある家庭というのは、家族システムにおける「家族のきずな」「家族のかじとり」次元が中庸の段階を指していると推測するからである。そしてまた「余裕のある家庭」という記述から、「心のゆとり感」を高めるには、中庸な家族システムが理想であると推測できるからである。

## 2 調査方法

### 2.1 調査の概要・対象

本研究では青年を対象としていることから、同志社大学の学生を対象に、質問紙によるアンケート調査を行った。質問紙は講義中に記入してもらい、その場で回収した。70人から回答を得られたが、不適正な回答もあり、最終的な有効回答数を68とした。回答はすべて数値化し、統計解析ソフトのSPSSを用いて分析を行った。

### 2.2 調査項目

質問紙の内容としては、「心のゆとり感」「思いやり」「人生満足度」「家族のきずな」「家族のかじとり」「基本属性」を主として回答を求めた。

「心のゆとり感」は、富田が作成した「心のゆとり感尺度(富田 2008)」を用いた。この尺度は、「不安や焦燥感を処理できずに圧倒され、視野が狭くなっている心のゆとりのない状態と、心が十分に機能しており、周囲に目を向けられる心のゆとりがある状態の両側面から心のゆとり感」(2008)を把握するもので、主観的に感じられる「心のゆとり感」を測定するものである。

「思いやり」は、内田由紀子・北山忍が作成した「思いやり尺度(内田・北山 2001)」を使用する。この尺度は「思いやり」を、『他者の気持ちを察し、その人の立場に立って考える』こと、そのうえで『その気持ちや状態に共感もしくは同情する』こと、そして『向社会的行動の動機づけとなる』という3つの側面がある(2001)と定義し、その3要素を包括的に含んだものである。

「人生満足度」は、Dienerが作成した「The Satisfaction With Life Scale (SWLS) (Diener

1985)」を、角野善司が日本語に翻訳した「人生に対する満足尺度（角野 1994）」を使用する。Diener の SWLS は、主観的幸福感の概念を踏まえ、従来作成されていた人生に対する満足尺度がもつ問題（老人以外には不向きなど）などを解決した一般的な尺度である。

「家族のきずな」「家族のかじとり」は、Olson が発表した「結婚・家族システムの円環モデル（Circumplex Model of Marital and Family Systems）」（Olson 1979）をもとに立木が作成した、「家族システム評価尺度（FACESKGIV-16）（立木 2009）」を使用する。この尺度は円環モデルをもとに、「日本の社会や文化に適合させるために、オリジナルに項目(Original items adaptive to Japanese Families)を作成し、実証的な項目分析を経て作り上げた」（立木 2009）日本版の円環モデルである。

基本項目としては、「性別」「学年」「年齢」「現在住んでいるところ」「ボランティア経験の有無」「ボランティア経験の回数」の 6 項目を尋ねた。

「心のゆとり感」「思いやり」「人生満足度」の 3 尺度に関しては、1「あてはまる」2「どちらかといえばあてはまる」3「どちらかといえばあてはまらない」4「あてはまらない」の 4 肢から 1 つを選択する形式になっている。「家族のきずな」「家族のかじとり」は、それぞれ 8 つある選択肢から、あてはまると思うものを 1 つだけ選択する形式となっている。

## 2.3 分析方法

「心のゆとり感」「思いやり」「人生満足度」の 3 尺度に関しては、「あてはまる」を 4 点、「どちらかといえばあてはまる」を 3 点、「どちらかといえばあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点として扱い、逆転項目は「あてはまる」を 1 点、「どちらかといえばあてはまる」を 2 点、「どちらかといえばあてはまらない」を 3 点、「あてはまらない」を 4 点として、その点数をそれぞれの尺度ごとに足し合わせた合計得点を、それぞれの尺度の得点とした。つまり、これらそれぞれの合計点の高い人ほど、「心のゆとり感」「思いやり」「人生満足度」を強く感じているということである。

「家族のきずな」「家族のかじとり」に関しては、立木の FACESKGIV-16 に従って、それぞれの 8 項目を 4 分類の水準に振り分けていく。「家族のきずな」尺度は、「家族はお互いの体によくふれあう」「誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて待っている」を「ベッタリ」、「悩みを家族に相談することがある」「休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある」を「ピツタリ」、「たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある」「わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない」を「サラリ」、「家族の間で、用事以外の関係は全くない」「家族のものは必要最低限のことは話す、それ以上はあまり会話がなない」を「バラバラ」といった水準に分ける。「家族のかじとり」尺度も、「困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる」「問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる」を「融通なし」、「家でそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある」「家の決まりは皆が守るようにしている」を「きっちり」、「問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである」「わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる」を「柔軟」に、「わが家ではみんなで約束したことでそれを実行することはほとんどない」「わが家では家族で何か決めても、守られたためしがなない」を「てんやわんや」といったように振り分け、分析を行っていく。

上記の作業を行った後、SPSS 上で単回帰分析と一元配置分散分析の 2 通りの方法を行い、仮説 I 仮説 II を検証していく。

### 3 調査結果

#### 3.1 各項目の回答

まずは、「思いやり」、「心のゆとり感」、「人生満足度」、「家族のきずな」、「家族のかじとり」のそれぞれに回答の傾向について、度数分布表をもとに見ていく。なお、「心のゆとり感」尺度については、使用した尺度がもともと、「心の充足・開放性」、「切迫・疲労感のなさ」、「対他的ゆとり」の 3 因子構造となっていたため、ここでは 3 因子に分けてその傾向を見ていくが、相関分析や一元配置分散分析を行う際には、3 因子をまとめて「心のゆとり感」尺度として分析する。

##### (1) 思いやり

「思いやり」に関する項目の回答の度数分布は以下の図 3 - 1、図 3 - 2 のようになった。この尺度は 22 項目のうち、10 項目が逆転項目となっている。通常項目 12 項目のうち、7 項目において、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した人が 70%を超えた。中でも、「頑張っている人を見ると応援したくなるほうだ」について、肯定的な回答をした人は 88.2%を占め、「つらい思いをしている人のために祈るような気持ちになることがある」「バスや電車でお年寄りや障害のある方が立っていたら席を譲ってあげないと可哀想だと感じる」「泣いている子供を見たらついやさしく声をかけたくなる」「人に対しては常に親切でいようと思う」について肯定的な回答をした人は、8 割近くを占める結果となった。また、「映画やテレビを見てよく泣く」の回答は、肯定的否定的それぞれ 50%となっている。

逆転項目(図 3 - 1、図 3 - 2 中の「#」がついた項目)においては、10 項目のうち、4 項目において、「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」と回答した人が 70%を超えた。中でも、「人が失敗した場合、その人に責任があるので同情の必要はない」に否定的な回答をした人は 86.8%を占めた。「試合で自分が勝つためならば相手が怪我をしても容赦しない」「仲間に入れない人がいてもそれはその人の責任だと思う」についての否定的な回答は 8 割近くであった。また「情にほだされたくない」「弱い立場にある人も自分で何とかするべきだ」の回答は 50%ずつとなった。さらに面白い結果として、逆転項目である「1 人 1 人の主張がぶつかることによって傷づく人がいても仕方がないと思う」に、肯定的な回答をした人は 72.0%を占めていた。



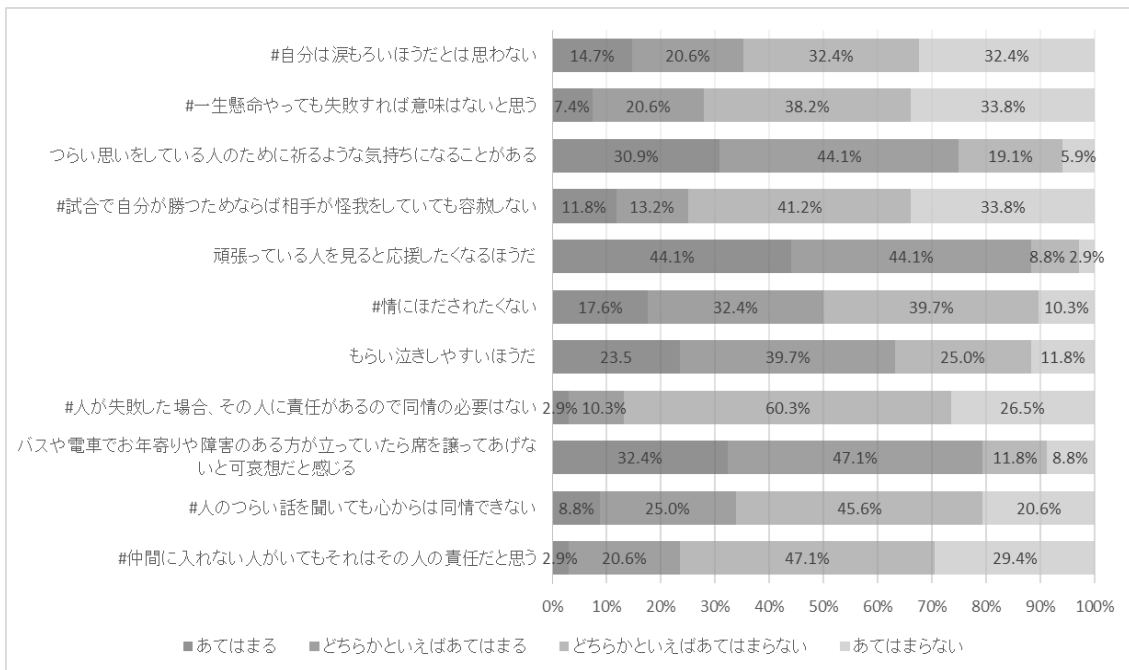


図3-1 「思いやり」に関する項目の回答①

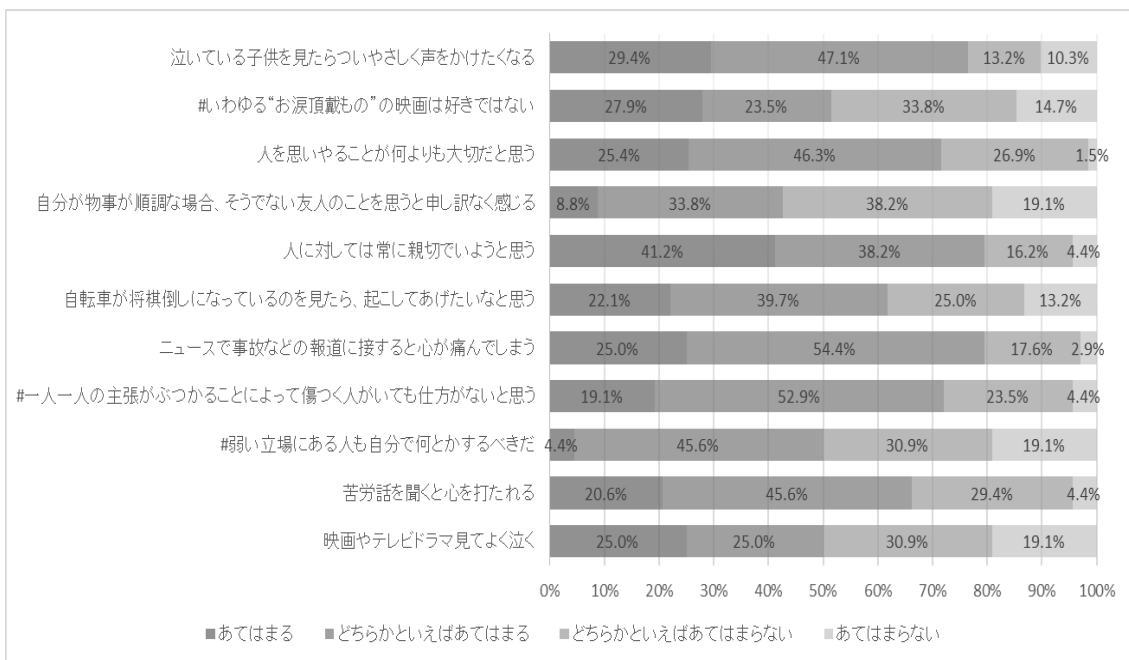


図3-2 「思いやり」に関する項目の回答②

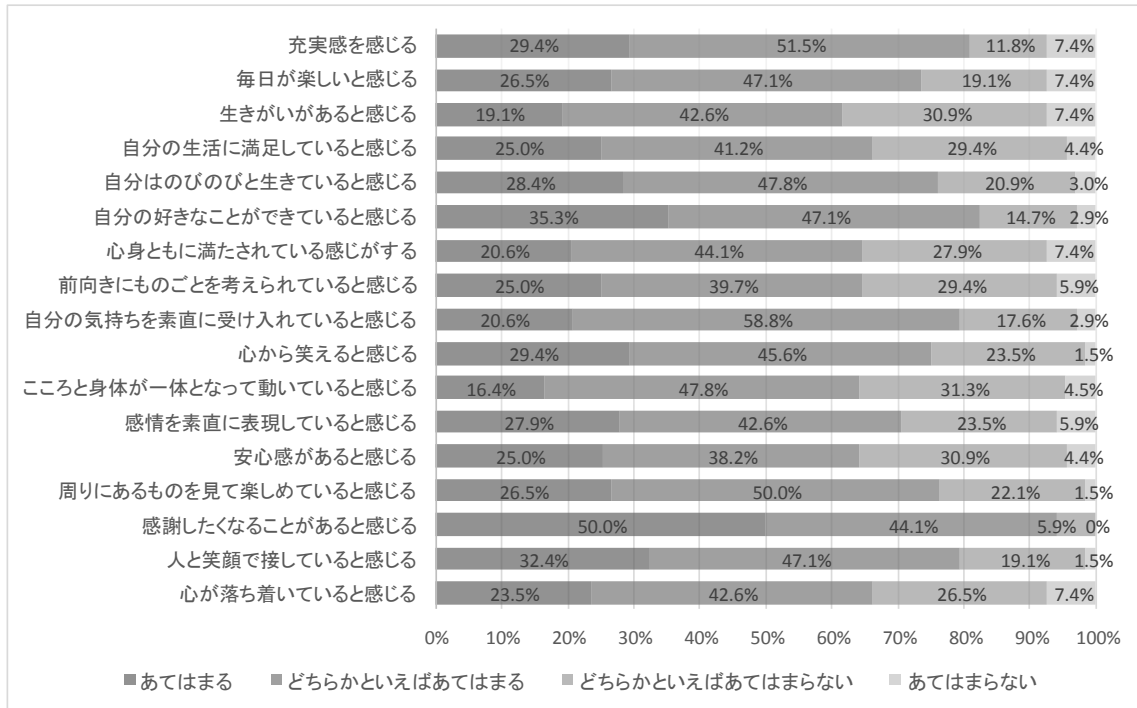
## (2) 心のゆとり感

「心のゆとり感」に関する項目の回答の度数分布は、以下の図4、図5、図6である。図中の「#」がついている項目は、逆転項目をあらわしている。「心のゆとり感」は3因子構造となっており、「心の充足・開放性」17項目、「切迫・疲労感のなさ」12項目、「対他的ゆと

り」6項目の、計35項目からなる尺度である。なお、「切迫・疲労感のなさ」には11項目、「対他的ゆとり」には1項目の逆転項目が含まれる。

**a) 心の充足・開放性**

17項目すべてにおいて、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」に回答した人は、最低でも61.7%を超えていた。中でも「充実感を感じる」「自分の好きなことができる」と感じる」についての肯定的回答は80%を超えており、「感謝したくなることがあると感じる」に至っては、肯定的回答が94.1%を占め、「あてはまらない」を回答した人はいなかった。



**図4 「心の充足・開放性（心のゆとり感）」に関する項目の回答**

**b) 切迫・疲労感のなさ**

通常項目である「無理していない感じがする」の肯定的回答は51.5%で、肯定否定半々の回答となった。

逆転項目である11項目のうち、6項目は肯定的回答が過半数を超えており、「不安を感じる」「時間を追われていると感じる」の回答は70%を超えていた。中でも「きつい、つかれたと感じる」に「あてはまらない」とか回答した人はわずか4.4%であった。否定的回答では、「息苦しいと感じる」「いらいらしていると感じる」「何もかもわずらわしいと感じる」が60%を超えていた。

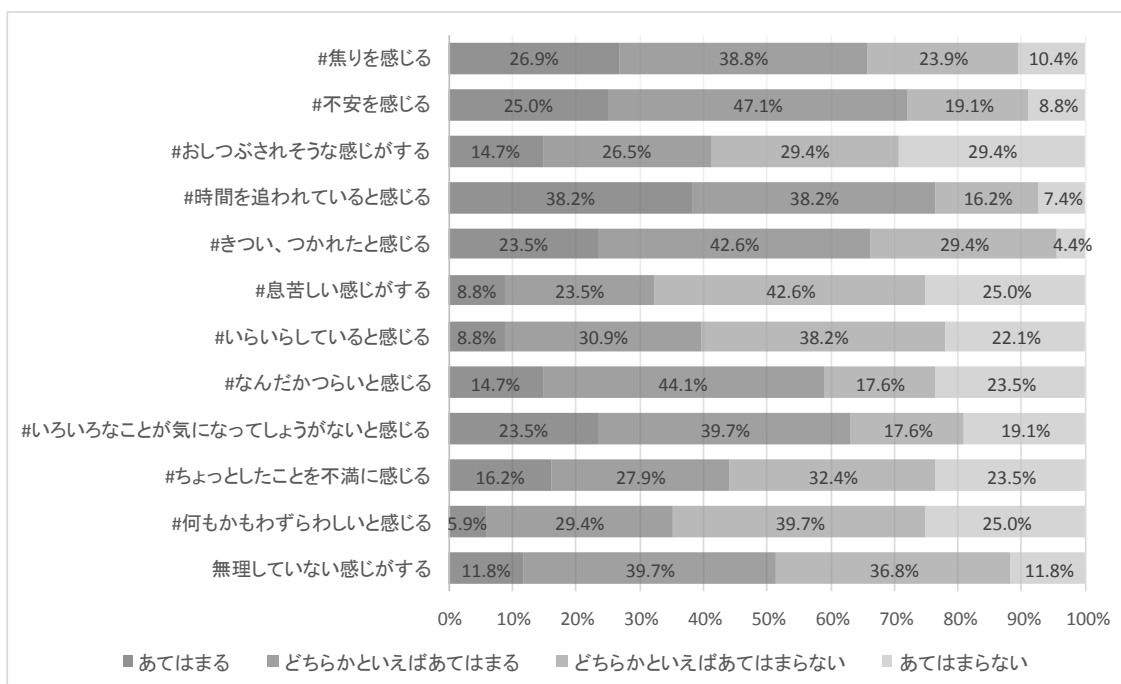


図5 「切迫・疲労感のなさ（心のゆとり感）」に関する項目の回答

### c) 対他的ゆとり

通常項目に関しては、「他人のことも思いやれる余裕があると感じる」「自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる」「他人に寛容になれると感じる」の3項目は、肯定的回答が70%を超える結果となった。そして「柔軟な考えや姿勢を持っていると感じる」は肯定否定ともに半々の回答となった。また、残りの2項目も含め、通常項目すべてにおいて、「あてはまらない」と回答した割合は、6%以下であった。

逆転項目である「自分のことで精一杯だと感じる」は肯定50%、否定50%という割合を占めた。全体的な特徴として、6項目とも「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」の回答が7割ほど占め、偏りが見られた。

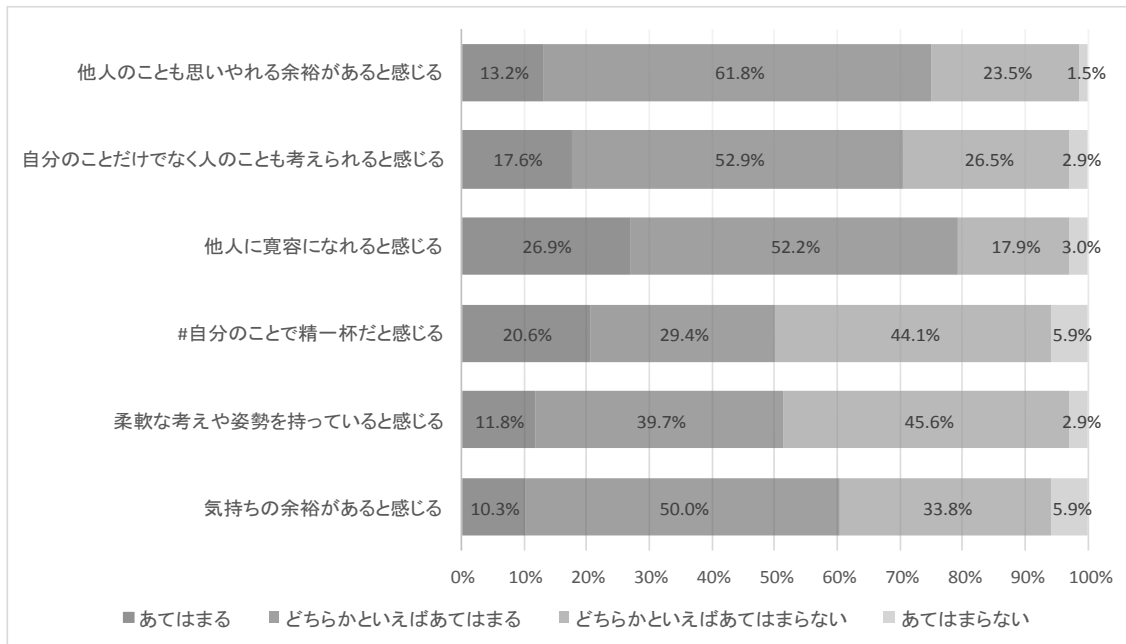


図6 「対他的ゆとり (心のゆとり感)」に関する項目の回答

### (3) 人生満足度

「人生満足度」に関する項目の回答の度数分布図は、以下の図7である。「人生満足度」に関する5項目のうち、4項目は肯定的回答、否定的回答に大きな差はなく、半々の割合となったが、「当てはまる」と回答をした割合は最大で13.2%、最小で1.5%という結果になり、「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」の回答が多くを占める結果となった。しかし、「人生をもう1度やりなおせたとしても、変えたいことはほとんどない」については、否定的回答が76.5%占め、「あてはまる」の回答は8.8%であった。

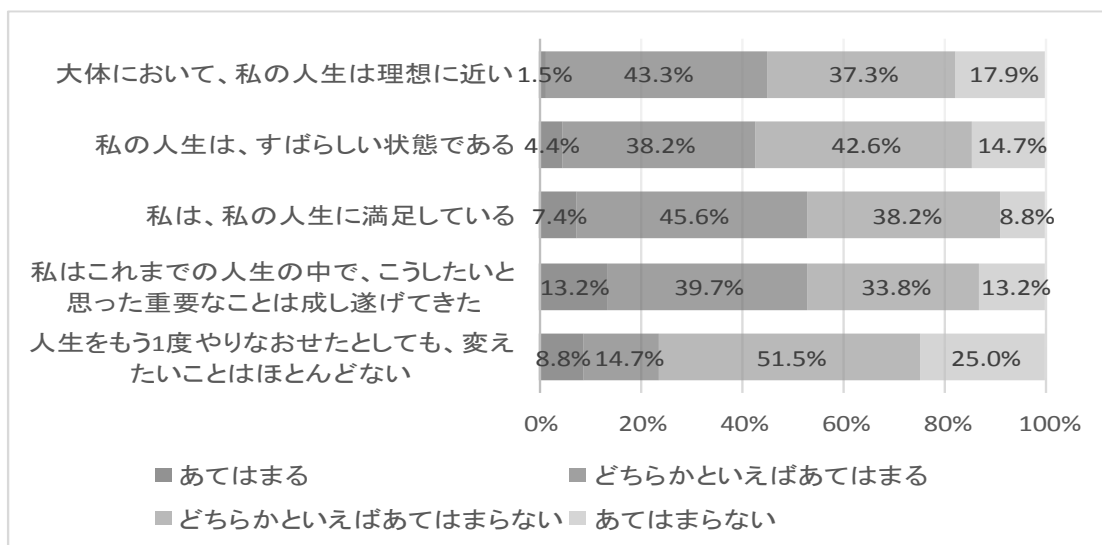


図7 「人生満足度」に関する項目の回答

#### (4) 家族システム

「家族のきずな」尺度に関する回答は、以下の図 8 である。図 8 によると、「ベッタリ」から「バラバラ」の順に、9.4%、34.4%、42.2%、14.1%となっており、中庸である「ピッタリ」「サラリ」が全体の 76.6%を占める結果となった。

「家族のかじとり」尺度の回答は、図 9 である。図 9 によると、「融通なし」から「てんやわんや」の順に、20.6%、34.9%、34.9%、9.5%の割合分布になり、「きっちり」「柔軟」の中庸なシステムが全体の 69.8%を占めているが、「融通なし」の割合も全体の 5 分の 1 を占める結果となった。

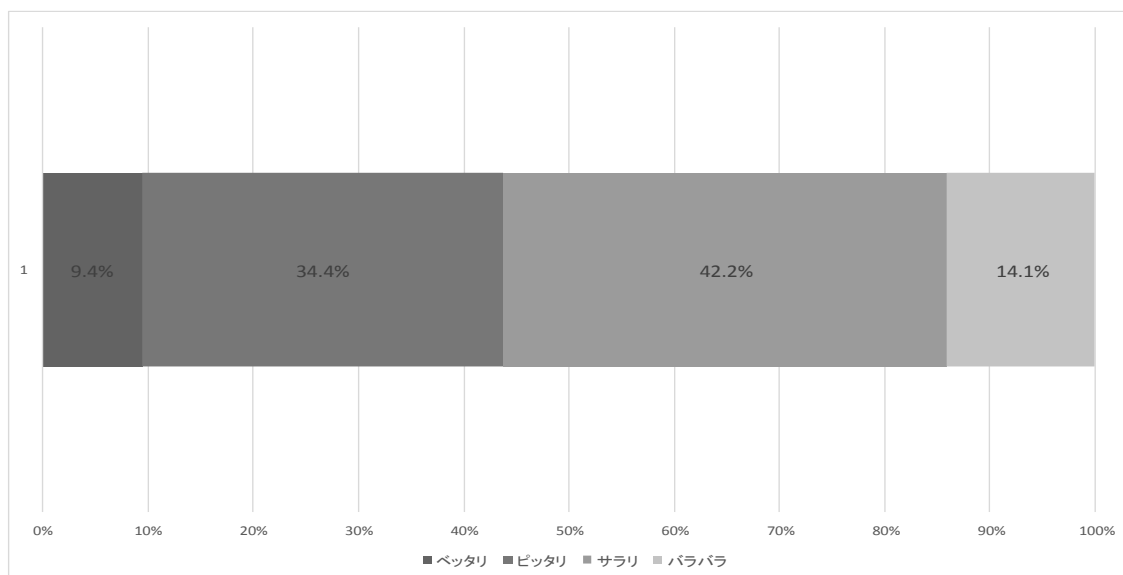


図 8 「家族のきずな」項目の回答

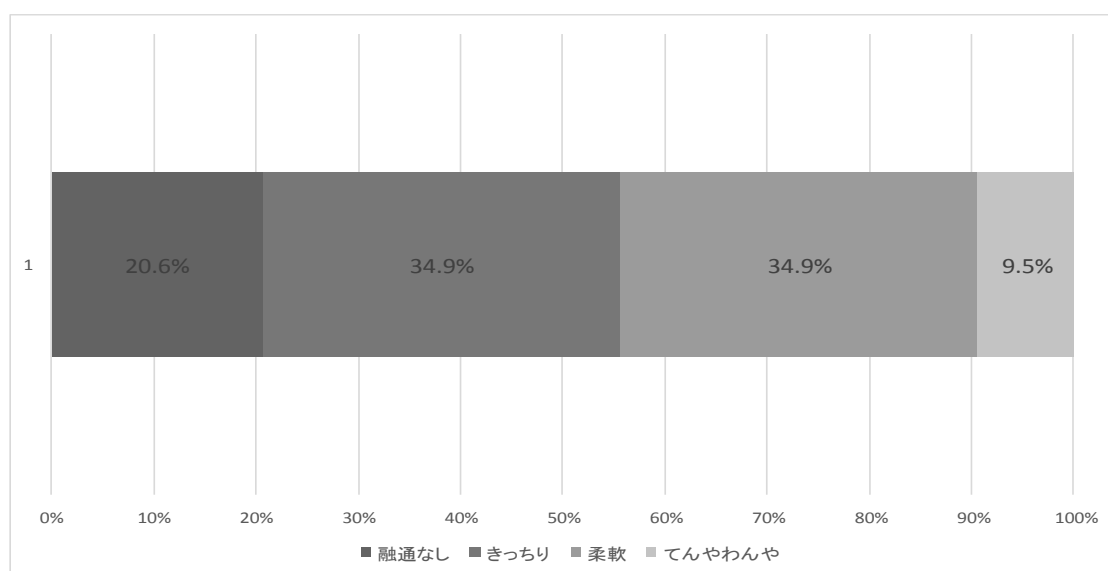


図 9 「家族のかじとり」項目の回答

### 3.2 相関分析の結果

ここからは、仮説 I II について検証していく。まずは仮説 1 「人生満足度が高い人ほど、思いやりの気持ちが高くなる」である。ここでは、独立変数を「人生満足度」、媒介変数を「心のゆとり感」、従属変数を「思いやり」として、各変数間の相関分析を行う。その結果が表 1 である。

表 1 各変数間の相関分析

	人生満足度尺度	心のゆとり感尺度	思いやり尺度
人生満足度尺度	—	.612**	.305*
心のゆとり感尺度		—	.355**
思いやり尺度			—

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

\* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

表 1 から、「人生満足度」と「心のゆとり感」では 1%水準で有意、「人生満足度」と「思いやり」では 5%水準で有意、「心のゆとり感」と「思いやり」では 1%水準で有意という結果がわかる。それぞれについて有意な相関が見られたので、それぞれを単回帰分析したグラフが、以下の図 10、図 11、図 12 である。すべての図が右肩上がりのグラフになっている。これらのことから、「人生満足度」と「思いやり」の関係は 5%水準で有意だが、「心のゆとり感」を媒介した場合、それぞれ 1%水準で有意という結果になり、「人生満足度」と「思いやり」の関係性は、「心のゆとり感」を媒介することでより確実に証明されるということがわかった。ゆえに、仮説 1 「人生満足度が高い人ほど、思いやりの気持ちが高くなる」が証明され、また、「人生満足度は、心のゆとり感を媒介することで、思いやりの気持ちを高める」ということが実証された。

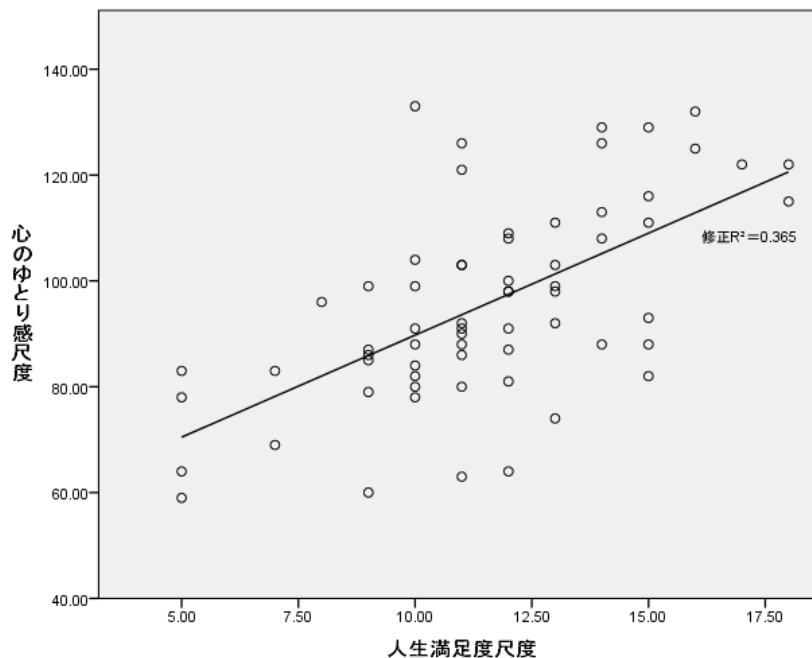


図 10 人生満足度と心のゆとり感

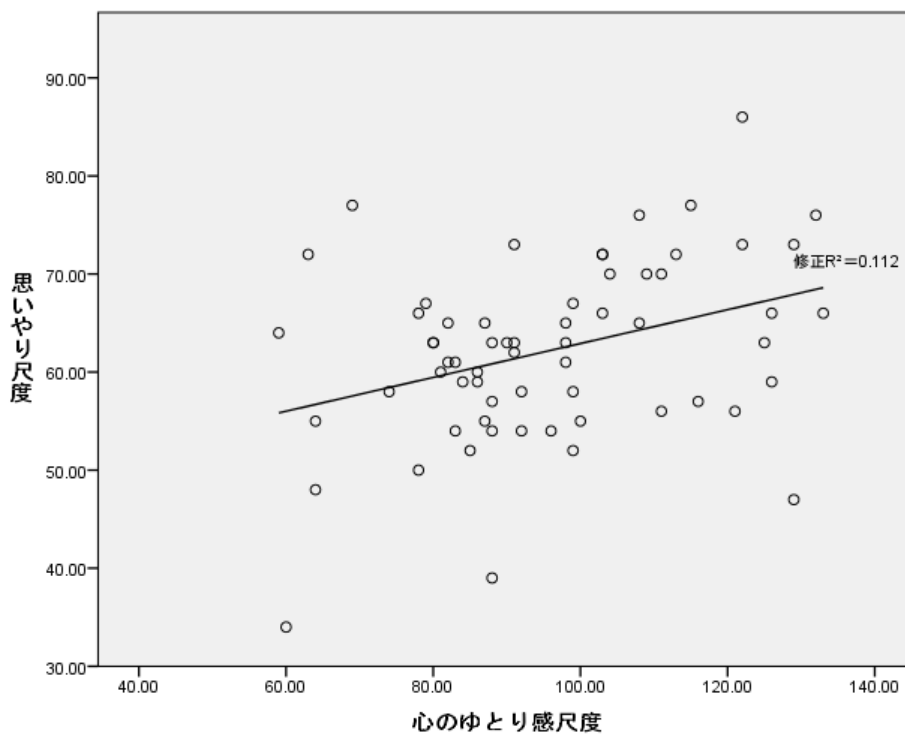


図 11 心のゆとり感と思いやり

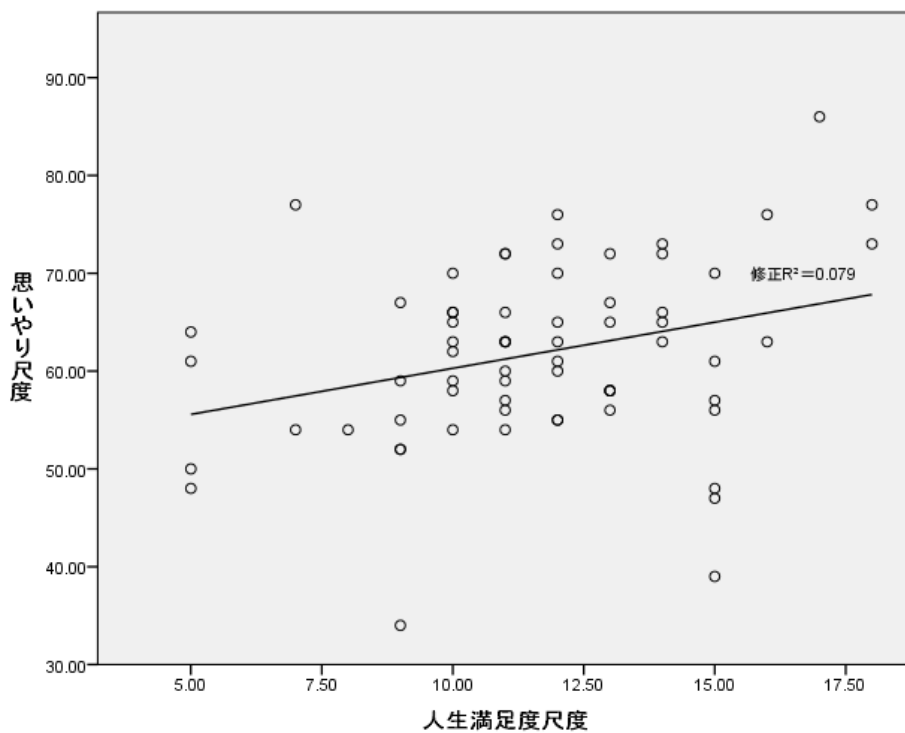


図 12 人生満足度と思いやり

### 3.3 一元配置分散分析の結果

次に、仮説Ⅱ「家族システムが中庸な家族ほど、思いやり、心のゆとり感が高くなる」について検証していく。

まずは「家族のきずな」についてである。表2は「思いやり」の、表3は「心のゆとり感」の平均値(標準偏差)についての分散分析の結果である。それぞれについて、ルビーンの等分散性検定を行った結果、有意確率が5%以上となったので、分散のF検定を行ったところ、「思いやり」は1%水準で有意、「心のゆとり感」は5%水準で有意という結果になった。

**表2 家族のきずなを独立変数とする思いやりの平均値(標準偏差)についての分散分析結果**

家族のきずな	ベッタリ n=6	ピッタリ n=22	サラリ n=27	バラバラ n=9	F値	有意確率
思いやり	70.0000 (8.09938)	64.5455 (7.43049)	61.2593 (8.17403)	52.7778 (10.62753)	6.331	0.001

**表3 家族のきずなを独立変数とする心のゆとり感の平均値(標準偏差)についての分散分析結果**

家族のきずな	ベッタリ n=5	ピッタリ n=20	サラリ n=26	バラバラ n=9	F値	有意確率
心のゆとり感	96.4000 (22.85388)	101.3000 (18.73949)	97.8846 (18.58457)	78.5556 (9.93870)	3.483	0.022

「家族のきずな」と「思いやり」「心のゆとり感」それぞれについて、有意な相関が見られたので箱ひげ図を作成した。図13が「思いやり」との、図14が「心のゆとり感」との結果である。図14から、「家族のきずな」と「思いやり」は、リニアな関係にあることがわかる。つまり、「家族のきずながベッタリである、すなわち強いほど、思いやりの気持ちは高くなる」ということである。一方、「家族のきずな」と「心のゆとり感」の関係は、カーブリニアとなっていることがわかる。つまり、「家族のきずながピッタリやサラリである、すなわち中庸であるほど、心のゆとり感が高くなる」ということである。



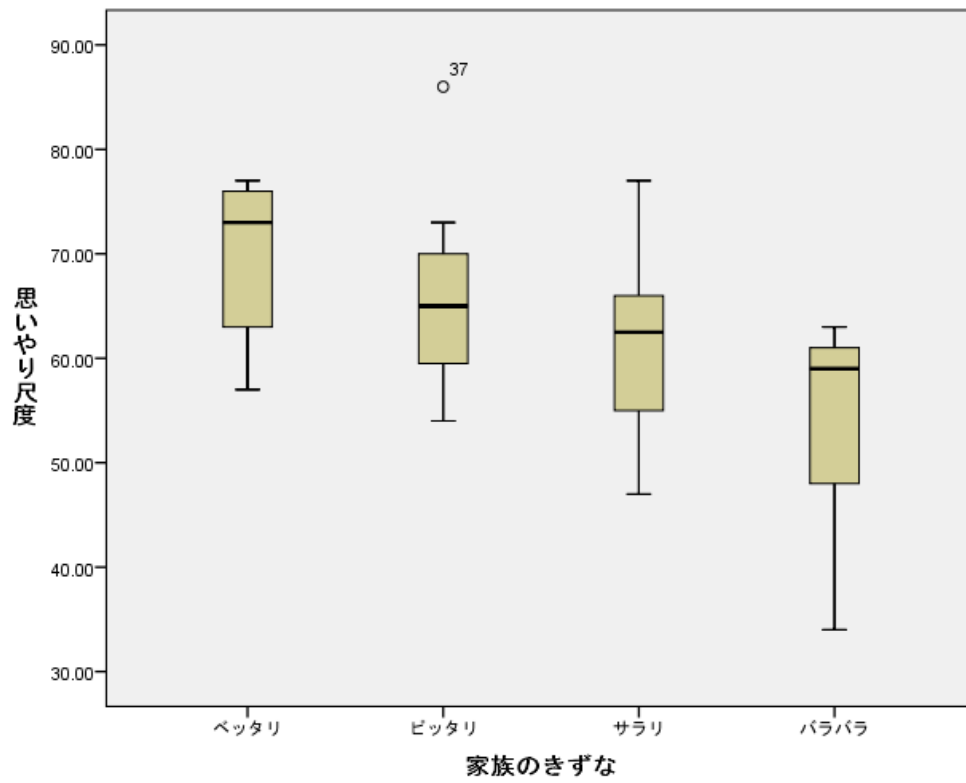


図 13 家族のきずなと思いやりの箱ひげ図

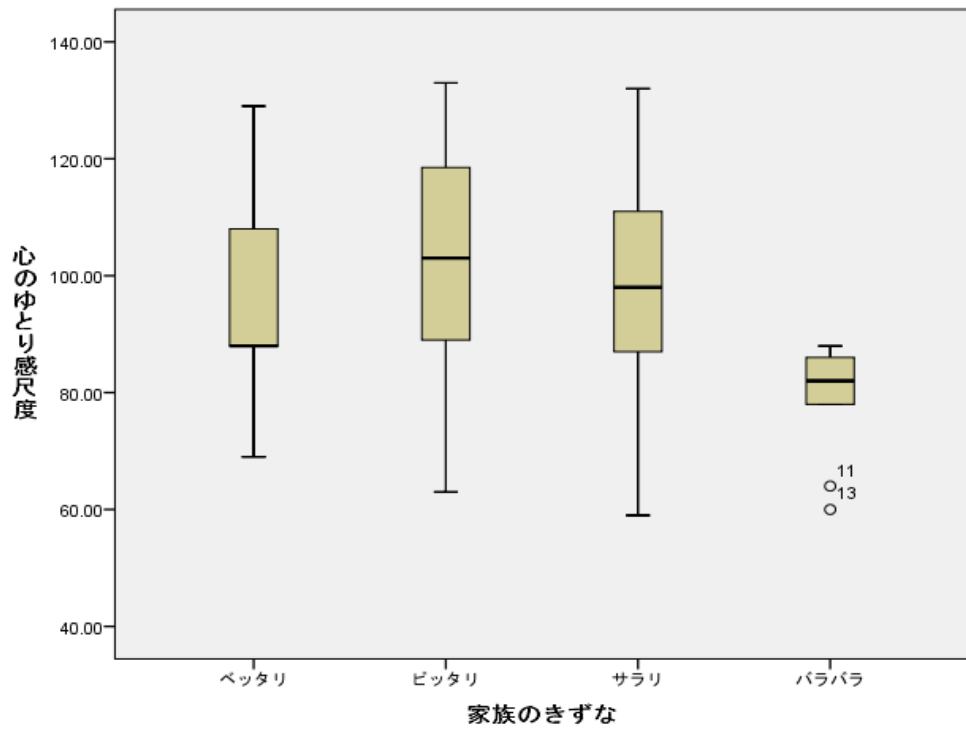


図 14 家族のきずなと心のゆとり感の箱ひげ図

続いて、「家族のかじとり」についてである。表4-1は「思いやり」の平均値(標準偏差)についての分散分析の結果である。ルビーンの等分散性検定を行ったところ、有意確率が5%未満となったので、ウェルチのF検定を行った。その結果が表4-2であり、5%水準で有意であることが示された。表5は「心のゆとり感」の平均値(標準偏差)についての分散分析の結果である。ルビーンの等分散性検定の結果、有意確率が5%以上であったので分散のF検定を行ったところ、5%水準で有意であった。

**表 4 - 1 家族のかじとりを独立変数とする思いやりの平均値 (標準偏差) についての分散分析結果**

きずな	ベッタリ n=6	ピッタリ n=22	サラリ n=27	バラバラ n=9
思いやり	70.0000 (8.09938)	64.5455 (7.43049)	61.2593 (8.17403)	52.7778 (10.62753)

**表 4 - 2 家族のかじとりを独立変数とする思いやりについてのウェルチの F 検定結果**

		統計量 <sup>a</sup>	自由度 1	自由度 2	有意確率
思いやり尺度	Welch	3.099	3	25.470	0.045

a. 漸近的 F 分布

**表 5 家族のかじとりを独立変数とする心のゆとり感の平均値 (標準偏差) についての分散分析結果**

家族のかじとり	融通なし n=12	きちり n=20	柔軟 n=21	てんやわんや n=6	F値	有意確率
心のゆとり感	89.4167 (19.54695)	103.7000 (19.22197)	97.0952 (18.44696)	82.1667 (9.45339)	2.853	0.045

「家族のかじとり」と「思いやり」「心のゆとり感」のそれぞれについて有意な相関が見られたので、箱ひげ図を作成した。図15が「思いやり」、図16が「心のゆとり感」の箱ひげ図である。図から、「家族のかじとり」と「思いやり」「心のゆとり感」はそれぞれ、カーブリニアな関係にあることがわかる。これはつまり、「家族システムが中庸であるほど、思いやり、心のゆとり感は高くなる」ということである。

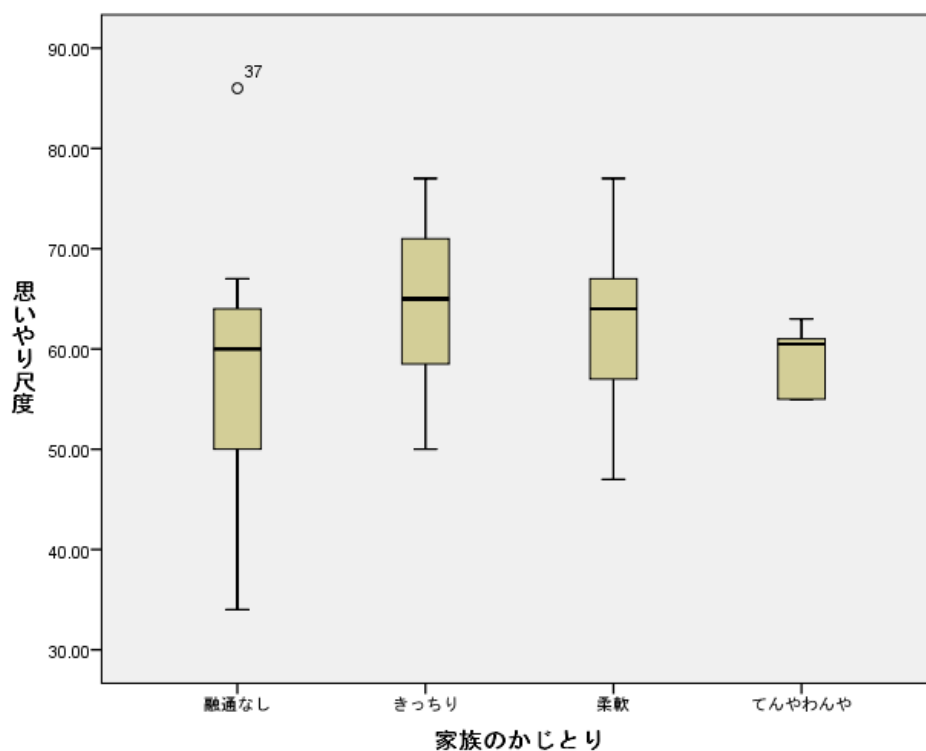


図 15 「家族のかじとり」と「思いやり」の箱ひげ図

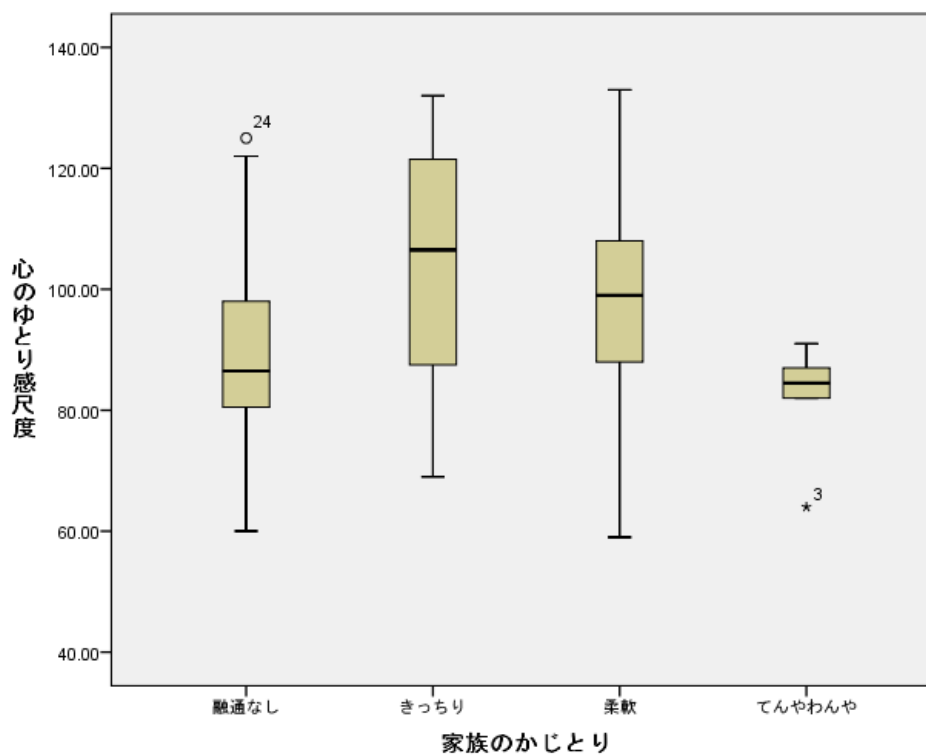


図 16 「家族のかじとり」と「心のゆとり感」の箱ひげ図

以上のことから、「中庸な家族システムであるほど、心のゆとり感は高くなる」、「きずな次元が高く、かじとり次元が中庸である中間型の家族システムであるほど、思いやりは高くなる」ということが示された。ゆえに仮説Ⅱは、「心のゆとり感」においてのみ正しいということが証明された。

## 4 考察

### 4.1 記述統計の考察

「思いやり」についての各項目における回答は、ほとんどが肯定的回答(逆転項目では否定的回答)を占める結果となり、多くの学生は、「思いやり」の気持ちが高いということが分かった。また、「バスや電車でお年寄りや障害のある方が立っていたら席を譲ってあげないと可哀想だと感じる」「泣いている子どもを見たらついやさしく声をかけたくなる」「自転車が将棋倒しになっているのを見たら、起こしてあげたいと思う」の3項目の肯定的意見はそれぞれ、79.5%、76.5%、61.8%と高い数値を示していることから、行動に表れない「思いやり」の気持ちがあることが見受けられた。松井らは、国際比較研究を通して、日本の若者の「思いやり」意識の低さが露呈したことを憂いている(松井ほか 1998)が、この結果から「思いやり」行動を妨げる要因を交えながら、日本の若者の「思いやり」意識が本当に低いかどうかは再考していくべきことであると考えられる。次に、「涙もろさ」を尋ねた3項目を見ていくが、「自分は涙もろいほうだとは思わない」に否定的回答、つまり涙もろいと回答した割合は64.8%、「もらい泣きしやすいほうだ」の肯定的回答が63.3%、「映画やテレビを見てよく泣く」がちょうど半々の回答となった。自分は涙もろくもらい泣きしやすいと考える学生が多いにも関わらず、映画やテレビをみて泣くかどうかは半々であったことから、友人や知人といった身近な存在や、自分が遭遇した状況に共感して涙を流すことは多いが、映画やテレビで起こっている身近でない自分とは遠い存在の話では、共感する学生は少ないということが考えられるのかもしれない。そして、逆転項目の中で唯一肯定的意見が高い割合を占めた「一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても仕方がないと思う」だが、これは自分の意見をしっかりと主張して曲げないという主体性の表れではないだろうか。ゆとりを持つ上で主体性が必要であるという主張が先行研究であったが、「心のゆとり感」高い学生が多く主体性が高いことから、このような結果につながったのではないだろうか。このように項目ごとに特徴はあったものの、今回調査した学生の「思いやり」意識は高いと考えてよいだろう。

次は「心のゆとり感」である。3因子ごとに分けて分析したことで青年のゆとりの構造が伺えたように思われる。心が十分に機能している状態である「心の充足・開放性」はすべてにおいて肯定的意見が高い割合を占めていたことから、多くの学生の心は健康的であることがうかがえた。しかし、不安や焦りから心が狭くなっていない「切迫・疲労感のなさ」では、焦りや不安を感じたり、時間を追われていると感じたりしている、といった消極的な回答が多くなっており、充実感を感じていても心が狭くなっている学生が多いことが判明した。これは、中井久夫の「もし、焦慮が去れば余裕が交代して出現する、というならばこれは大変有難いことである。しかし、実際はそうではない」。そして『『あせりを自覚するほどのゆとり』が生まれてから、『ゆとりを手許においていけるほどのゆとり』に至るまでの道程はいかに長いことであろうか』(中井 1976)という考えをもとに、富田・高橋が述べた「切

迫感や焦燥感を感じるのは『焦りを自覚する程の心のゆとり』がある状態と考える」(富田・高橋 2005)ということに一致する結果である。つまり、心にゆとりがあるからこそ、切迫感や焦燥感を感じることができているのである。自由が増えたことで勉強以外にもアルバイト、サークル活動など、やれることが増えた大学生だからこそ、忙しさから切迫・疲労感を感じているのかもしれない。しかしそれゆえに毎日の生活に充実感を覚えるようになり、心の充足・開放性は高くなったと考えられるだろう。生活が充実しているからこそ、他者に気を配ることができる「対他的ゆとり」の各項目の肯定的意見も、総じて高いという結果になったのであろう。

続いて人生満足度についてである。5項目のうち4つの回答は、肯定的意見、否定的意見が半々となっており、さらに「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」に回答が偏る結果となった。また「人生をもう1度やりなおせたとしても、変えたいことはほとんどない」の肯定的回答は、23.5%しか占めなかった。これは、青年期にあたる学生たちにとって、現在の期間は自身のアイデンティティを構築していく時期でにあたるからだと考えられる。Erik, H. Erikson の発達段階説によると、青年期はアイデンティティとアイデンティティ拡散が対立する時期であり、自分とは何なのか、自分は何がしたいのかなど、自分自身を見つめながら自己を確立していく期間なのである。(Erikson 1994=2011)。このことから、自分がどういった人間であるかを模索する時期にあたることから、「人生満足度」の肯定・否定の回答が半々になったのではないだろうか。

最後に「家族のきずな」「家族のかじとり」についてである。どちらの次元の回答をみても、中庸な段階(ピッタリとサラリ、キッチリと柔軟)を占めている割合が高いことから、家族のシステムが健康的に機能している家庭が多いように思われる。しかし、かじとり次元においては、融通なしの回答が20.6%と全体の5分の1を占めていることから、役割関係や家庭の権力構造ががちがちとなっている家庭も多いことが分かった。

## 4.2 相関分析の考察

今回の研究では、「思いやり」「心のゆとり感」「人生満足度」の相関分析の結果、「人生満足度が高い人ほど思いやりの気持ちが高くなる。その際に、心のゆとり感が2つの尺度を媒介している」ということが分かった。ゆえに平木が述べていた、「心に空間があることは、心が十分に機能しており、充実感や安心感があり、他者へ配慮するなど周囲に目を向ける視野の広さがある状態」(平木 2008)を、実証的に証明できたと言える。

「人生満足度」は個人の主観的な判断で測るものであることから、何ができていて、何を手にしていたら自分の人生は幸せであると感じることが出来るのかは人それぞれである。しかし、それがどのような基準であれ、「人生満足度」が高ければ心にゆとりは生まれるのである。そしてそれが「思いやり」の気持ちに繋がるっていくのである。

これらの結果や、ゆとりについて稲垣が述べた、「人間が人間であるため、人間としての『存在の豊かさ』を実現するために必要不可欠なもの」(稲垣 1982)という言葉や、土居のゆとりの価値の二元性、そして都留の、『思いやり』もまた、高度に人間らしい生のいとなみである」(都留 1980)という考えなどを踏まえて考察すると、「人生満足度」と「心のゆとり感」と「思いやり」の関係性が見えてくる。「人生満足度」が高いということは、物質的、金銭面、精神面で様々な余裕をもたらし、それが表の価値としてのゆとりにつながっていくといえる。しかしただ表の価値としてのゆとりがあるだけでは、人は本当の意味でのゆとり

を感じることはできない。人間としての存在の豊かさを感じることでできる裏の価値としての「心のゆとり感」が必要である。人生満足度が高い人というのは、人間が持つ限りない欲望を、そこそこのところで抑えるための何かを見つけた人であろう。我妻らの言葉を借りれば「深い広がりのある世界」のことであり、それこそが「心のゆとり感」なのである。その裏の価値である「心のゆとり感」は、誰かへの愛情や信頼感といった高度な人間らしい営みのことであり、その中の1つとして「思いやり」が存在するのである。よく、他者への善意はめぐりめぐって自身に帰ってくるという言葉を目にするが、誰かへの「思いやり」は、「思いやり」を受けた人だけでなく「思いやり」を送った人の心も幸せにし、豊かにしてくれるものである。「心のゆとり感」がもたらす他者への「思いやり」は同時にまた、「心のゆとり感」を高めてくれるものなのである。

しかし、人間は欲深い存在である。「隣の芝生は青い」ということわざがあるように、自分が持っていないものを欲しがるそんな生き物であるといえる。「人生満足度」の肯定的意見が半分ほどであったのを、青年期の学生が自我の確立の時期にいるからであると述べたが、もしかしたらこの欲深さのためであるのかもしれない。こう考えると人の欲求は無限であり、いつまでたっても人生に満足することが出来なくなってしまう。そしてそれは心のゆとりを失わせしまい、結果として自分のことしか考えられないような「思いやり」のない人間になってしまうのではないだろうか。しかしこういった負の連鎖を止めてくれるのは誰かからの「思いやり」であると筆者は考える。誰かからのちょっとした「思いやり」の言動を受けた時、またはそういったものを見かけた時、人は感謝の気持ちや共感を覚えるはずである。その気持ちは自分自身を見つめ直すことにつながり、自分の生き方や考え方を考えるきっかけになり、誰かのことを「思いやる」ような、そんな気持ちが芽生えるのではないだろうか。筆者は、熊本地震の救援活動に参加した知人からこんな言葉を聞いた。「住民の方がおっしゃっていた言葉を聞いて私はボランティアの大切さを改めて感じました。それは『ボランティアなんて偽善だと思っていたけれど、あなたたちが来てくれたおかげで、私たちも誰かのために行動したいと思えるようになった。本当にありがとう』という言葉です。「思いやり」は伝染していくのである。

アイデンティティを確立していく時期の青年にとって、その「思いやり」の気持ちを送ってくれる友人の存在は大切なものであると感じる。ゆえに青年期の友人関係は、「思いやり」に影響を与えるだけでなく、「人生満足度」や「心のゆとり感」にも好影響を与えるのではないかという新たな仮説も生まれた。

今回の調査では、「人生満足度が心のゆとり感をもたらし、思いやりの気持ちにつながる」という一連の流れを証明することができたが、このように考えていくと、この3つの変数は、双方向に関連し合っているものであるのかもしれない。「思いやり」の気持ちがあることは心を豊かにし、人生を彩ることもつながると考えられるからである。いずれにしても、「人生満足度」「心のゆとり感」「思いやり」という3変数に、有意な相関があることを証明することはできたのである。

### 4.3 分散分析の考察

一元配置分散分析の結果から、「中庸なバランスのよい家族システムであればあるほど、心のゆとり感は高くなり、かじとり次元が中庸で、きずな次元が高い中間型であればあるほど、思いやりの気持ちが高くなる」ということがいえることがわかった。このことは先行研

究による仮説を一部否定する結果となった。

「心のゆとり感」については、先行研究からの仮説の通りの結果となった。「家族のきずな」が中庸であることは、適度な親密さや距離間をもたらし、窮屈でもなくかといって、悩みを相談できない関係性でもないことが安心感をもたらし、「心のゆとり感」を高めることに繋がるのであろう。「家族のかじとり」が中庸であることは、親からのしつけが厳しすぎることもなく、ほったらかしでもない上に、家族の役割関係も安定しており、そのバランスのよさが「心のゆとり感」に繋がるのであろう。つまり中庸なバランスのよい家族システムであればあるほど、家庭環境に余裕が生まれ、結果として青年の「心のゆとり感」を高めることに繋がるのであろう。

一方、「思いやり」に関しては、「家族のきずな」次元が高いベッタリなほど、高くなるという結果が出た。つまり、家族の間に対人的な距離はほとんどなく、過度の帰属要求が求められ、常に一緒にいるような家族システムが、最も「思いやり」を高めるということになるのである。先行研究による適切な「思いやり」を否定する結果となったのである。この原因を考えるにあたって、大平健が述べた現代の青年間の対人関係の特徴をあげる。大平は、円滑な対人関係を保つために、あえて相手の気持ちに踏み込まず、葛藤をできるだけ避けることを「やさしさ」とする若者が増えていると述べている（大平 1995）。自分の気持ちを相手に素直に伝えることや、相手の気持ちに踏み込むことで友人関係が崩れてしまうことを恐れ、表面的な友人関係しか築けない青年が増えているのであろう。このことが「家族のきずな」が強い家族システムが、「思いやり」を高めるということの原因であるのかもしれない。つまり、家庭の外では相手に気を使い、親密な対人関係を築くことが困難な青年たちにとって家族というものは、自分の思いを吐き出し、相手の感情にまで踏み込んで話すことが出来る、本当の意味での気持ちを通わすことのできる場所なのかもしれない。それゆえに、「家族のきずな」が強い家族システムであれば、思いがぶつかり合うことも多いはずであり、そのことが相手の気持ちを考えること、相手の気持ちを思いやることにつながり、結果として「思いやり」が高くなっていくのではないだろうか。

## 終わりに

従来の研究では、「思いやり」に影響する要因として共感性や役割取得能力などが注目され、数多くの研究がされていたが、青年を対象とした本調査を通して、「人生満足度」と、両者の媒介要因になる「心のゆとり感」が「思いやり」意識に影響しているということを証明することが出来た。また、現代青年の友人関係の特徴から、必ずしもバランスのよい家族システムを持つ家庭が、青年の「思いやり」意識を高めるとは限らないということも判明した。そして、「思いやり」が低下していると言われているが、行動に表れない「思いやり」の形に注目することで、青年の「思いやり」意識は決して低くないということも発見することが出来た。しかし、「人生満足度」が「思いやり」意識を高めるという考えの下、調査を進めてきたが、「人生満足度」、「心のゆとり感」、「思いやり」はそれぞれが互いに補完し合っている関係であるということも見えてきた。今後、サンプル数を増やし、青年だけではなく様々な年代の方を対象にした調査を行うことで、この 3 変数の関係性をしっかりと解明することができるのではないだろうか。

本稿の最後として平木の言葉をあげる。

思いやりの心は、人が一人ひとり違うことを心の底からわかってはじめて、相手への関心として芽生えると思われる。人が違うことを恐れず、めんどうがらず、当たり前のこととして人に関心をもちたいものである。(平木 2000: 730)

社会には、子どもから高齢者、障がい者や外国人、LGBT といった様々な人が多様な思いや考えをもって生活している。自分と違った人との交流は怖いものであるかもしれないが、彼らは自分が持っていなかった価値観を与えてくれる大切な存在でもある。「人生満足度」が個人の主観で測るものであるならば、考え方やものの見方を考えれば、きっと今よりも自分の人生に幸福を感じることができよう。小さな世界だけで物事を考えず、視野を広げていき、社会にいる多様な人々に目を向け「思いやり」の気持ちを常に持ち続けられるような人が社会に溢れれば、誰もが人生に満足したゆとりのある社会が生まれるのではないだろうか。どんな時でも他者を「思いやる」気持ちを忘れずにいたいものである。

## 謝辞

ご指導してくださった立木先生、アンケート調査に協力してくださった皆様方、本当にありがとうございました。

## 参考文献リスト

- Andrews, F. M. & Withey, S. B., 1976, *Social Indicators of Well-Being: Americans' Perceptions of Life Quality*, New York: Springer US.
- 新井郁男, 2004, 「『ゆっくリズム』の復権——無駄・遊び・ゆとりをどう復活させるか」『児童心理』 58: 821-827.
- Diener, Ed, Robert, A. Emmons, Randy, J. Larsen, & Sharon, Griffin, 1985, “The Satisfaction With Life Scale,” *Journal of Personality Assessment*, 49 (1) : 71-75.
- 土居健郎, 1983, 「『ゆとり』について」松田義幸編『ゆとりについて——ヨゼフ・ピーパーのレジャー哲学をめぐって』誠文堂新光社, 123 - 133.
- 堂野恵子, 2000, 「思いやり能力の発達——親子関係、仲間とのあそび、友だち関係」『児童心理』 54: 749 - 754.
- Eisenberg, Nancy & Mussen, Paul, H., 1989, *THE ROOTS OF PROSOCIAL BEHAVIOR IN CHILDREN*, Cambridge: Cambridge University Press (=1991, 菊池章夫・二宮克美訳『思いやり行動の発達心理』金子書房.)
- 遠藤利彦, 2000, 「思いやりの『ある・なし』とはどういうことか——気持ちと言動の不一致」『児童心理』 54: 743 - 748.
- Erikson, E. H., 1994, *Identity and the Life Cycle*, New York: W. W. Norton & Company (=2011, 西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房.)
- 平木典子, 2000, 「思いやりを育む」『児童心理』 54: 721 - 730.



- Hoffman, M. L. 2000, *Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice*, New York: Cambridge University Press (=2001, 菊池章夫・二宮克美訳『共感と道徳性の発達心理学』川島書店.)
- 古川秀夫・山下京・八木隆一郎, 1993, 「ゆとりの構造」『社会心理学研究』9(3): 171 - 180.
- 稲垣良典, 1982, 「『ゆとり』と恵み」松田義幸編『ゆとりについて——ヨゼフ・ピーパーのレジャー哲学をめぐる』誠文堂新光社, 209 - 223.
- 角野善司, 1994, 「人生に対する満足尺度(the Satisfaction With Life Scale[SWLS])日本版作成の試み」『Annual convention of the Japanese Association of Educational Psychology』36: 192.
- 菊池章夫, 1983, 「向社会的行動」三宅和夫ほか編『波多野・依田 児童心理学ハンドブック』金子書房, 715 - 734.
- , 1984, 「向社会的行動の発達」『教育心理学年報第』23: 118-127.
- , 1998, 『また 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル』川島書店.
- 子安増生・二宮克美, 2004, 『キーワードコレクション 発達心理学 改訂版』新曜社.
- 松井洋・中里至正・石井隆之, 1998, 「愛他性の構造に関する国際比較研究——米国、中国、韓国、トルコ、日本の中学・高校生を対象として」『社会心理学研究』13(2): 133 - 142.
- 文部科学省, 2009, 「教育課程の改訂」, 文部科学省ホームページ, (2016年12月10日取得, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318313.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318313.htm)).
- 内閣府, 2008, 「むすび ゆとりと成熟した社会の構築に向けて」, 平成20年度版国民生活白書ホームページ, (2016年12月10日取得, [http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/01\\_honpen/html/08sh030000.html](http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9990748/www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h20/01_honpen/html/08sh030000.html)).
- , 2011, 「平成23年度『親と子の生活意識に関する調査』全体」, 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)青少年、子供・若者育成支援ホームページ, (2016年12月18日取得, <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h23/pdf/zenbun/3-2.pdf>).
- , 2013, 「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」, 内閣府青少年に関する調査研究等ホームページ, (2016年12月18日取得, [http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2\\_2.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b2_2.pdf)).
- 中井久夫, 1976, 「分裂病者における『焦慮』と『余裕』」『精神神経学雑誌』78: 58 - 65.
- 中里至正, 1995, 「異質な日本の親子関係——国際比較研究の結果から」『犯罪と非行』105: 41 - 60.
- 大平健, 1995, 『やさしさの精神病理』岩波書店.
- 大石繁宏, 2009, 『幸せを科学する——心理学からわかったこと』新曜社.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H. & Russell, C. S., 1979, “Circumplex model of marital and family systems: Cohesion and Adaptability dimensions, Family types, and clinical applications,” *Family Process*, 18: 3-28.
- Paul, Mussen & Nancy, Eisenberg-Berg, 1978, *Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children*, New York: W. H. Freeman & Company (=1980, 菊池章夫訳『思いやりの発達心理』金子書房.)
- 坂井玲奈, 2006, 「思いやりに関する研究の概観と展望——行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱」『Bulletin of the Graduate School of Education』45: 143-148.
- Shin, D. C. & Johnson, D. M., 1977, “Avowed happiness as an overall assessment of the quality of

- life,” *Social Indicators Research*, 5 (1) : 475 - 492.
- 鈴木隆子, 1992, 「向社会的行動に影響する諸要因——共感性・社会的スキル・外向性」『The Japanese Journal of Experimental Social Psychology』 32(1): 71 - 84.
- 立木茂雄, 1999, 『家族システムの理論的・実証的研究』川島書店.
- , 2012, 「Welcome to FACESKG Page」, 立木茂雄研究室ホームページ, (2016年12月15日取得, <http://www.tatsuki.org/>).
- 富田真弓・高橋靖恵, 2005, 「現代青年の『心のゆとり』に関する基礎的研究——質的データの分析から」『Psychological research of Kyushu University』 6: 229 - 235.
- 富田真弓, 2008, 「心のゆとり感尺度の作成の試み」『Psychological research of Kyushu University』 9: 223 - 233.
- 都留春夫, 1980, 「『思いやり』について——人間学的考察」『児童心理』 34(4): 1-15.
- 上田薫, 1980, 「ゆとりと主体性」『児童心理』 34: 250 - 255.
- 内田由紀子・北山忍, 2001, 「思いやり尺度の作成と妥当性の検討」『心理学研究』72(4): 275 - 282.
- 我妻洋・藤原房子・松田義幸, 1984, 「『ゆとり』の構造」松田義幸編「『ゆとりについて——ヨゼフ・ピーパーのレジャー哲学をめぐって』誠文堂新光社, 150 - 201.

## 付録

実際に調査に使った質問紙ですが、配布後、何点か表記ミスや誤字脱字を回答者から教えて頂きました。その箇所を修正したものを載せています。ご指摘ありがとうございました。

# 人生満足感や心のゆとり感が及ぼす思いやりの 気持ちについての調査

このアンケートは、「人生満足感や心のゆとり感が及ぼす思いやりの気持ちに」について調査するものです。アンケートの回答結果につきましては、私の卒業論文にて、調査データとして使用させていただきます。統計的に処理いたしますので、個人が特定されるようなことはございません。何卒、ご協力をよろしくお願いいたします。

同志社大学 社会学部社会学科 4 回生  
村瀬 太一

このアンケート用紙は、全 6 ページで構成されています。設問は、問 1～問 12 まであります。まず、以下の【質問内容】と【回答上の注意】をよくご覧になってから、ご回答ください。

## 【質問内容】

### I ご自身の「内面的意識」や「家族関係」について 全 64 項目

- 問 1 心の豊かさ 17 項目
- 問 2 心の焦燥感 12 項目
- 問 3 他者への配慮 6 項目
- 問 4 思いやりの気持ち 22 項目
- 問 5 人生の満足感 5 項目
- 問 6 家族のようす 2 項目

### II このアンケートの回答されるご自身について 全 6 項目

## 【回答上の注意】

- ・ 設問ごとに該当する番号を 1 つだけ選び、○で囲んでください。
- ・ ( ) には、数字をお書きください。
- ・ I の回答は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の 4 段階評価です。
- ・ 回答が終わりましたら、記入漏れや記入ミスがないかどうか、ご確認をお願いいたします。

I 以下の問1~6については、ご自身の「内面的意識」や「家族関係」についてお尋ねします。

問1. 以下は「心の豊かさ」をたずねる項目です。あなたは、それぞれにどの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1	2	3	4
あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはまらない

	1	2	3	4
① 充実感を感じる	1	2	3	4
② 毎日が楽しいと感じる	1	2	3	4
③ 生きがいがあると感じる	1	2	3	4
④ 自分の生活に満足していると感じる	1	2	3	4
⑤ 自分はこのびのびと生きていると感じる	1	2	3	4
⑥ 自分の好きなことができていると感じる	1	2	3	4
⑦ 心身ともに満たされている感じがする	1	2	3	4
⑧ 前向きにものごとを考えられていると感じる	1	2	3	4
⑨ 自分の気持ちを素直に受け入れていると感じる	1	2	3	4
⑩ 心から笑えると感じる	1	2	3	4
⑪ こころと身体が一体となって動いていると感じる	1	2	3	4
⑫ 感情を素直に表現していると感じる	1	2	3	4
⑬ 安心感があると感じる	1	2	3	4
⑭ 周りにあるものを見て楽しめていると感じる	1	2	3	4
⑮ 感謝したくなることがあると感じる	1	2	3	4
⑯ 人と笑顔で接していると感じる	1	2	3	4
⑰ 心が落ち着いていると感じる	1	2	3	4

問2. 以下は「心の焦燥感」をたずねる項目です。あなた、それぞれどの程度当てはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはまら ない	4 あてはま らない
① 焦りを感じる	1	2	3	4
② 不安を感じる	1	2	3	4
③ おしつぶされそうな感じがする	1	2	3	4
④ 時間を追われていると感じる	1	2	3	4
⑤ きつい、つかれたと感じる	1	2	3	4
-----				
⑥ 息苦しい感じがする	1	2	3	4
⑦ いらいらしていると感じる	1	2	3	4
⑧ なんだかつらいと感じる	1	2	3	4
⑨ いろいろなことが気になってしょうがないと感じる	1	2	3	4
⑩ ちょっとしたことを不満を感じる	1	2	3	4
-----				
⑪ 何もかもわずらわしいと感じる	1	2	3	4
⑫ 無理していない感じがする	1	2	3	4
	1	2	3	4

問3. 以下は「他者への配慮」に関する項目です。あなた、それぞれどの程度当てはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはまら ない	4 あてはま らない
① 他人のことを思いやれる余裕があると感じる	1	2	3	4
② 自分のことだけでなく人のことも考えられると感じる	1	2	3	4
③ 他人に寛容になれると感じる	1	2	3	4
-----				
④ 自分のことで精一杯だと感じる	1	2	3	4
⑤ 柔軟な考えや姿勢を持っていると感じる	1	2	3	4
⑥ 気持ちの余裕があると感じる	1	2	3	4

問4. 以下は「思いやりの気持ち」に関する項目です。あなたは、それぞれについて、どの程度あてはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1	2	3	4
あてはまる	どちらかとい えばあては まる	どちらかとい えばあてはま らない	あてはまら ない

① 自分は涙もろいほうだとは思わない	1	2	3	4
② 一生懸命やっても失敗すれば意味はないと思う	1	2	3	4
③ つらい思いをしている人のために祈るような気持ちになることがある	1	2	3	4
④ 試合で自分が勝つためならば相手が怪我をしても容赦しない		2	3	4
⑤ 頑張っている人を見ると応援したくなるほうだ	1	2	3	4
⑥ 情にほだされたくない	1	2	3	4
⑦ もらい泣きしやすいほうだ	1	2	3	4
⑧ 人が失敗した場合、その人に責任があるので同情の必要はない	1	2	3	4
⑨ バスや電車でお年寄りや障害のある方が立っていたら席を譲ってあげないと可哀想だと感じる	1	2	3	4
⑩ 人のつらい話を聞いても心からは同情できない	1	2	3	4
⑪ 仲間に入れない人がいてもそれはその人の責任だと思う	1	2	3	4
⑫ 泣いている子供を見たらつい優しく声をかけたくなる	1	2	3	4
⑬ いわゆる“お涙頂戴もの”の映画は好きではない	1	2	3	4
⑭ 人を思いやることが何よりも大切だと思う	1	2	3	4
⑮ 自分が物事が順調な場合、そうでない友人のことを思うと申し訳なく感じる	1	2	3	4
⑯ 人に対しては常に親切でいようと思う	1	2	3	4
⑰ 自転車が将棋倒しになっているのを見たら、起こしてあげたいと思う	1	2	3	4
⑱ ニュースで事故などの報道に接すると心が痛んでしまう	1	2	3	4
⑲ 一人一人の主張がぶつかることによって傷つく人がいても仕方がないと思う	1	2	3	4
⑳ 弱い立場にある人も自分で何とかするべきだ	1	2	3	4
㉑ 苦労話を聞くと心を打たれる	1	2	3	4
㉒ 映画やテレビドラマ見てよく泣く	1	2	3	4

問5. 以下は「人生の満足感」をたずねる項目です。あなたは、それぞれについてどの程度当てはまりますか。もっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえば あてはまる	3 どちらかといえば あてはまらない	4 あてはまらない
------------	------------------------	--------------------------	--------------

- |                                       |   |   |   |   |
|---------------------------------------|---|---|---|---|
| ① 大体において、私の人生は理想に近い                   | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ② 私の人生は、すばらしい状態である                    | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③ 私は、私の人生に満足している                      | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④ 私はこれまでの人生の中で、こうしたいと思った重要なことは成し遂げてきた | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤ 人生をもう1度やりなおせたとしても、変えたいことはほとんどない     | 1 | 2 | 3 | 4 |

問6. 以下の2つの質問は、あなたの家族のようすについてお聞きするものです。それぞれについて、あなたのご家族に最もあてはまるものを1つ選んで[ ]の中に○をつけてください。

家族の中でのそれぞれの役割やふるまいについて	一緒に過ごす時間について
1 [ ] 問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	1 [ ] たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある
2 [ ] 家でそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	2 [ ] わが家では、子どもが落ち込んでいるときは親も心配するが、あまり聞いたりしない
3 [ ] 困ったことが起こったとき、いつも勝手に判断を下す人がいる	3 [ ] 悩みを家族に相談することがある
4 [ ] わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	4 [ ] 家族はお互いのからだによくふれあう
5 [ ] 家の決まりは皆が守るようにしている	5 [ ] 家族の間で、用事以外の関係は全くない
6 [ ] わが家はみんなで約束したことでさえもそれを実行することはほとんどない	6 [ ] 家族のものは必要最低限のことは話す、それ以上はあまり会話がでない
7 [ ] 問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がおとる	7 [ ] 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある
8 [ ] わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	8 [ ] 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている

Ⅱ アンケートに回答されるご自身についてお答えください。設問ごとに該当する番号を1つだけ選び、○で囲んでください。( )には、数字をお書きください。

問7. 性別

1. 男性      2. 女性      3. その他

問8. 学年

1. 1回生      2. 2回生      3. 3回生      4. 4回生

問9. 年齢

(            ) 歳

問10. 現在住んでいるところ

1. 自宅      2. 学生寮      3. 下宿

問11. ボランティア経験の有無

1. 有      2. 無

問11で、1. と回答した方に、問12.をお聞きします。

問12. ボランティア経験の回数

(            ) 回

質問は以上になります。

恐れ入りますが、

記入漏れが無いかももう一度ご確認ください。

ご回答いただきまして、ありがとうございました。